

# 東京保育専門学校紀要

## 第5号

| 〔研究論文〕                             | ページ                                 |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| コロナ禍のコミュニケーション環境の変化が子育て中の保護者に与える影響 |                                     |
| －「内面がわからない」不安－                     | 高木麻美子 1                             |
| 〔実践報告〕                             |                                     |
| 東京保育専門学校における実習事前学習（2022年度）について     |                                     |
|                                    | 今井まり、橋本 萌、岡本弘子 12                   |
| 実践報告会についての報告                       | 東京保育専門学校教職員 24                      |
| 2022年度「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究について  |                                     |
|                                    | 今井まり、高木麻美子、三室絵梨子、橋本 萌、大須賀隆子、岡本弘子 29 |

# 東京保育専門学校紀要

第 5 号

# コロナ禍のコミュニケーション環境の変化が 子育て中の保護者に与える影響 —「我が子の内面がわからない」—

高木麻美子

The Impact of the Change in Communication during the COVID-19  
Pandemic on Parents raising children  
—Anxiety about not Knowing one's own Children's feelings—

Mamiko Takagi

コロナ禍のコミュニケーション環境の変化が子育て中の保護者に与える影響について、幼稚園に子どもを通わせている保護者が抱いている心配や不安をコロナ禍以前と以降に着目して調査検討し、SCAT による分析方法で明らかにしていった。コロナ禍でのマスク着用等、コミュニケーションにおける非言語的情報が減少したことが、保護者にとって自分の子どもの内面理解の難しさに影響し、その理解を補うために、より多くの外面的表面的情報を求めるとともに、「見た目」に対して過敏に反応するようになったことが示唆された。

Key word：コロナ禍、コミュニケーション環境の変化、保護者、子育て不安、子ども理解

## I 問題と目的

世界的な新型コロナウイルス感染症の流行により、わが国でも 2020 年から所謂コロナ禍に入り、3 年が経過した。その間、数回にわたる緊急事態宣言の発出など様々な対策が講じられ、私たちの日常を取り巻く環境も、「コロナ前とコロナ後」で大きく変化した。その中でもコミュニケーション環境の変化は甚だしいと言えよう。

緊急事態宣言下では、出勤もオンラインに、また学校、幼稚園、保育所にも行けない状況となり、他者と対面で接する機会が、大人だけでなく子どもも激減したと思われる。緊急事態宣言が段階的に解除された後も、感染症対策の一つである飛沫感染防止として、マスク着用とともに、3 密（密接・密集・密閉）回避等の行動自粛は引き続き

求められ、コロナ禍以前とはコミュニケーション環境は大きく変わったと言える。特に対面でのコミュニケーションの機会を得ることは、非常に困難になったと考えられる。

2023 年 3 月 13 日よりマスク着用については個人の判断に、また 5 月 8 日からは 5 類感染症として医療体制も特別対応から通常対応へ転換される（新型コロナウイルス等感染症対策推進室，2023）が、コロナ禍の生活を続けおよそ 3 年が経過し、私たちは良くも悪くもこのような日常に慣れ親しんだとも言えよう。コロナ禍に入った 2020 年に東京都が感染拡大を防止する習慣として呼びかけた「新しい日常」（東京都生活文化局広報広聴部広報課，2020）が、2023 年の今では「日常」となり、マスク着用においても、毎日新聞(2023)の世論調査によ

ると、その義務が解除された後も、多くの大人も子どももマスク着用を続けているという。

上述したように、コロナ禍では特に対面でのコミュニケーションの機会を得ることが、非常に困難になった。たとえ数少ない機会に出会えても、マスク着用で顔の表情の半分が隠されているため、表情から相手の情報を得ることが難しい。マスク着用とコミュニケーションの継続との関係について調査した高木（2021）によると、コミュニケーション継続には、自分のメッセージに対する相手の反応、特に非言語的メッセージである感情が関わっており、それを読み取るためには口元を含めた顔全体の動きが見える必要があるとし、マスクはそれを阻害していると述べている。さらに子どもへの影響について、高木（2022）は、マスク着用でのコミュニケーションは、保育場面において、子どもと保育者双方に不安感をもたらしていること、さらに子どもの表情理解能力や感情認識能力の発達に影響を与える可能性を示唆している。

では子育て中の保護者には、この状況はどのような影響をもたらしているのだろうか。コロナ禍での外出自粛や保護者の自宅勤務、および子どもの保育施設等の休業など、家庭内で保護者と子どもが過ごす時間は長くなったと考えられる。そして関わる時間が長くなった分、保護者の子育て等に関する悩みや心配事も増えることが予想される。一方、保育施設の休業が解かれた後も、施設への保護者の立ち入り制限や、保育者との直接的な関わり、さらに所謂井戸端会議のような保護者同士での語らいの場を持つことに対する自粛ムードは継続し、子育てに関するちょっとした心配などを相談できるような、対面でのコミュニケーションの機会は少なくなってしまったように思われる。

篠原・森口・利根川（2021）の報告によると、親子関係や家庭でのやり取りに関してコロナ禍以前と以降を比較すると、子どもを怒鳴る、たたくといった不適切な関わりが、幼児や小学生児童の親において増え、また児童虐待が増加しているという。また、木村・井出・尾島（2022）は、子育て中の母親の精神的健康は、コロナ禍で悪化傾向にあると述べている。

このように、保護者と子どもとの関わりにおいて、コロナ禍でさまざまな問題が生じてきた一方で、上で述べたように、それらの問題を解決するような機会は保護者にとって得にくくなっているという現状も存在していると考えられる。

本稿では、コロナ禍のコミュニケーション環境の変化が、子育て中の保護者に与える影響について、保護者が抱えている心配や不安に着目して調査検討し、それらと今後の子どもたちの成長との関係について考察することが目的である。

## II 方法

### 1. 調査方法

本調査は、「最近の幼稚園児の保護者が抱く心配事は、コロナ禍前と比較してどのような違いがあるか」という質問項目について、半構造化インタビューを用いて行った。

### 2. 分析方法

本調査では、SCAT（Steps for Coding And Theorization）（大谷，2008）を使用した。この手法は、質的分析手法の一つであり、比較的小規模の質的データの分析にも有効であるとされ、その質的データの客観性を高めることにも有効であるとされているため、本調査ではSCATを取り入れた。

この手法では、まず言語データをセグメント化する。そして（1）データの中の着目

すべき語句を抽出する。(2) それを言い換えるためのデータ外の語句を考案する。(3) それを説明するための語句を考案する。(4) そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく。コーディング終了後、ストーリーラインを作成するという作業を行った。

### 3. 調査協力者

調査協力者は、都内 X 幼稚園で幼稚園教諭として働く 10 名である。全員に、本調査の趣旨や目的に同意をいただいている。X 幼稚園の空き教室においてインタビューを実施した。データは調査協力者の許可を得て、ボイスレコーダーアプリを用いて録音した。面接回数は一回で、所要時間は 5 分程度、面接記録は逐語録を作成した。

### 4. 調査時期

2022 年 4 月

### 5. 倫理的配慮

面接内容は学術目的のみに使用し、守秘義務を守ること、また答えたくない質問に対する拒否も可能であること等を、事前に口頭で説明し、了解を得た。

## Ⅲ 結果

調査対象者 10 名のデータを上のように SCAT による手法で分析を進め、ストーリーライン化した。次にその 10 名のストーリーラインの概要を示す。【】は構成概念を示している。

#### 1. A 保育者のストーリーライン

A 保育者は、子どもの習い事において、近年【選択肢の多様化】が生まれていると感じている。習い事は、保護者にとって子どもの才能や能力を発見する手段のひとつ

であり、我が子の才能や能力の早期発見を望んでいるようだと言っている。また保護者は【才能や能力の他との早期の差別化】を望み、子どもが【一芸に秀でる】ことを期待しているが、そこには周囲から【認められたい】という願いが込められていると感じている。

一方、【選択肢の多様化】により、【一芸に秀でる】チャンスも増加しており、したがってそれを望む傾向も増しているのではと考えている。このように保護者の、できるだけ早期に子どもの才能や能力を発見し、周囲とは一線を画したいという傾向に、この保育者は【能力は自ら発見】するものではないかと疑問を感じ、子どもの他の可能性を見逃してしまうのではと危惧を抱いている。

#### 2. B 保育者のストーリーライン

B 保育者は、コロナ禍での【対面的コミュニケーションの疎遠】の影響を危惧している。ちょっとした心配ごとは、周囲の身近な相手に【相談することで安心感】が得られるが、いわゆる井戸端会議のような情報交換の機会が激減したため、保護者にとって、家庭での子どものことなどといった【些細な心配事の未解決】状態が継続しているように感じている。

それゆえ保護者は、園などの自分の目が届かない場面での子どもの様子に対して一層心配してしまい、【見えない姿への不安】を抱えてしまうのだろうと、この保護者は考えている。しかし近頃の保護者の傾向として、【子どもの表面的な言葉に影響】を受けやすさがあり、その結果、不安を一層募らせてしまうという事態が生じているようだと言っている。

#### 3. C 保育者のストーリーライン

この保育者自身も、園児と同年齢くらい

の子どもを育てている。そのため、自分と同様な立場の保護者の思いには共感できると感じている。

最近の保護者について、【育児の悩みの増加】傾向を感じているが、特に【園と家庭の子どもの違いに悩む】保護者が多いととらえている。それも【些細な問題の解決が困難】なことが多く、一つ一つちよとした【子どもの行動に注目】してしまう保護者の様子が気になっている。

#### 4. D 保育者のストーリーライン

D 保育者は現在年長児の担任をしており、保護者の多くが、子どもの【小学校入学に対する不安】や【小学校入学への焦り】を抱えているようだと見ている。保護者は子どもに対し「ちゃんとする」ことを望み、「きちんとしているか否か」に注目し、そのための【子どもを統制する手段】を求めているようだと捉えている。

また、【自由と統制の区別とバランス】を取ることが困難な保護者が多く、「自由といってもどこまでが自由なのか」という意見のように、「自由」というものの捉え方に対する戸惑いを感じる保護者の増加を危惧している。また、保護者が子どもに対して「統制」を重視する背景には、見た目を重視する傾向が存在しているようだと云っている。

この保育者は、幼児期は自由な遊びから学びを得るものだと考えており、最近の保護者の【自由より統制を重視】する姿勢に対して疑問を抱き、【教育における自由とは】何かについて自問自答している。

#### 5. E 保育者のストーリーライン

E 保育者は、【子どもの見えない姿への不安】を抱えている保護者の増加を感じている。自分の子どもに関する【視覚的情報を切望】し、子どもの一挙一動を手取る

ように把握したいという保護者が多いようだと考えている。

#### 6. F 保育者のストーリーライン

F 保育者は、最近の保護者の傾向として【周囲の評価に対する敏感さ】があるようだと捉えている。出处や信憑性如何に関わらず、子どもに関する情報に過敏だという。

特に【集団の中にいることの重要性】を強く意識し、それを否定するような他者からの一言（「○○ちゃんが一人でした」など）に触れると、その情報の真偽に関わらず不安が増大し、「うちの子には友達が一人もいない」といった極端な方向に傾いてしまうようだと感じている。そしてその不安を解消するために、より数多くの情報を入手しようと躍起になるようだと見ている。

また、情報に対する価値観について、保護者と保育者との違いを感じている。保育者は、子どもを含め全体を眺めて大切な情報を保護者に提供することを努めているが、一方保護者は、玉石混交でも多くの情報を入手し、子どもの一挙一動を把握することを望んでいるようだと感じている。

#### 7. G 保育者のストーリーライン

G 保育者は、園における【子どもの円滑な人間関係を重視】する保護者の増加を感じている。子どもの生活態度から、子どもの人間関係へと保護者の注目が移ってきており、さらに子どもの人間関係に関する、保護者自身の目に見えないことや聞いていないこと、そして知らないことに対して不安を抱き、その不安を解消するために、子どもの一挙一動をすべて手に取るように把握したいと望んでいる傾向があるようだと捉えている。

また、人間関係におけるトラブル等に対して、非常に敏感であり、【トラブル対処の苦手さと不安】を抱く保護者が多いよう

に感じている。この保育者は、保護者の不安感が以前より増していることを鑑み、【保育者側の対応に一層の丁寧さ】を心掛けている。

## 8. H 保育者のストーリーライン

H 保育者は、自分の子どもが「一人である」ことを非常に気にする最近の保護者の傾向を語っていた。保護者は【周囲と異なることへの恐れ】を抱き、子どもが【周囲と同じように見えることの重要性】を強く意識し、特に遊びの場面で顕著だという。この保育者は、遊びにも発達段階があるという認識を抱いており、一人遊びも大切な一つのステップであり、それを経験した上で集団遊びへとステップを踏むと考えている。しかし、保護者の多くは友達と一緒にいること、すなわち集団の中にいることが重要であり、【一人遊び＝周囲と異なる】と捉えているようだと考えている。

またこのように、見た目に流されがちで、発達面等を見落とすといった【子どもの内面に対する保護者の無理解】の存在を危惧している。

## 9. I 保育者のストーリーライン

I 保育者は、近頃の保護者は【表面的な情報に左右される】傾向があると見ている。特に我が子の言葉にはどんなに些細であっても影響を受けやすく、子どもの【ある言葉や場面の切り取り】といった断片的な情報を字面通り受け取ってしまい、それに振り回されてしまう保護者が多いようだと感じている。

一方で、その言葉が示す「意図」に対してはさほど頓着しないなど、子どもの内面を重視しない傾向もあり、このように内面を見落とす表面的で断片的な情報から、偏った我が子像を抱いてしまう保護者の増加を危惧している。

## 10. J 保育者のストーリーライン

J 保育者は、子どもの人間関係を、「集団遊びをしている姿が見られるか否か」で評価している保護者の多さを感じている。また【目に見える情報の断片に左右される】保護者が多く、子どもの一挙一動に対して敏感であるようだと考えている。

その一方、保護者自身が直接目で見ることができない、園での子どもの様子に関しては、強い不安を抱いているようだと感じている。

# IV 考察

## 1. 「見た目」に流される

### (1) 「一人である」ことに対する不安

「〇〇ちゃんが一人でいたよ」等という他者の何気ない言葉に対して、敏感な保護者の多さがこの調査から示唆された。＜家では一人で遊んでいるけれども、幼稚園で遊んでいますかとか＞（B 保育者）、＜ママ友同士の話の中で、なんとかちゃんが一人でいたよ、なんて話を聞くと、うちの子友達いないんですか＞（F 保育者）など、多くの保育者から、自分の子どもが「一人である」ことを気にする保護者の様子が語られた。

H 保護者の＜その発達段階まで、まだ入っていないので。一人遊びをしての集団遊びなので＞という言葉にもあるように、子どもの遊びはいくつかに分類でき、年齢や発達によってその遊びは変化し、個人差も大きい。パーテン（1932）によると、子どもの遊びは、何もしていない遊び、傍観的遊び、ひとり遊び、平行遊び、連合遊び、協同遊びの6つに分類され、子どもの社会性の発達に伴って変化するという。しかし本調査の保護者にとって、集団にいてこそ遊びとしての価値があり、一人で遊んでい

る状態にはその価値は認められていないように思われる。

井上（2009）の研究では、ひとり遊びの増加を心配だと答える母親の多さが指摘されていたが、本調査では、自分の子どもが「一人である」という状態や場面对して、保護者は不安や恐れを感じていることが明らかにになった。

## （２）集団の中にいること

また、＜うちの子は特定の友達がいって、その子と関わることができているか、一人じゃなくて何人かの友達と遊べてるのか＞

（J 保育者）のように、自分の子どもが一人である状態に大きな不安を抱く一方、たとえ子どもが集団の中にいた場合でもやはり不安を抱いてしまう保護者の姿が語られた。加えて、＜お友達とうまくやっているかということに、保護者の方から問い合わせが多くあります。今誰と仲がいいのかしらとか、うまくやっているのかしらというところで、保護者の方は気にしているようです…。トラブルがあった時に、今後その子とうまくやっていけるかしら、と心配することがあるようです＞（G 保育者）というように、子どもが集団の中にいることは、上で述べたように保護者にとって安心材料の一つだが、それだけでは不安であり、その中で子ども同士トラブルなく関わっている姿を望む声が聞かれた。

このように保護者は【集団の中にいることの重要性】を強く意識し、子どもが集団の中にいること、さらにそこで「うまくやること」を望んでいるということが示唆された。

## （３）「ちゃんとしている」こと

子どもが「ちゃんとしている」ことを望む保護者の思いに対する保育者からの言及もあった。＜子どもの自由さよりも、ちゃ

んとできるかどうか何度も質問がありました。…自由って言うけれどどこまでが自由なのか、その線引きが保育者ではないお母さんにとっては難しいみたいで、自由にさせすぎると座れないじゃないかとか、自由席だけどじゃあ指定席になったら座れるんですかとか。…先生の話をちゃんと聞いているかとか。自由でいいというよりも＞（D 保育者）。

広辞苑によると「自由」とは、心のままであること・思う通り・自在・古くは、勝手気ままの意であり、「ちゃんと（きちんと）」とは、整っていて、乱れないようす・正確で規則正しいようすであるという。広辞苑に則ると、D 保育者の言葉から、保護者にとって子どもが自由であるということは、子どもが勝手気ままにふるまうこと、好ましくないこととみなされているようである。一方子どもがちゃんとしているということは、周囲と同じように整っていて乱れなく行動していることであり、保護者にとって好ましいこととしてみなされているように思われる。

一方、保育者にとって子どもが自由であるということは、上で挙げた広辞苑における、心のままであることという意を指していると思われる。幼稚園教育要領（2017）の第2章ねらい及び内容「人間関係」にも、『一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気づき、自信をもって行動できるようにすること。』と記されているが、心のままに自由であることは子どもの発達において重要なものであると言えよう。また＜幼稚園が子どもの自由な発想を大事にしてるところがあったり…＞という D 保育者の言葉にもこのことは表れていると思われる。



上のように保護者と保育者の間で、子どもの活動において何を重要視するかということに関して、差異があるように思われる。差異の例として、子どもが「一人にいる」という状況の受け止め方に関して、保護者にとっては、周囲と異なるので好ましくなく、一方保育者にとっては、子どもの主体的な活動なので大切なものである、といったものが挙げられる。

このように、最近の保護者は、自分の子どもが集団の中にいること、そして周囲と同じようにふるまっている姿といった「見た目」を重要視し、それが揺らぐような情報や場面に遭遇すると不安感が増大してしまう、という傾向があることが本調査から明らかになった。

## 2. 「内面」が読み取れない

### (1) 外面的、視覚的な情報を

＜園の様子をすごく細かく知りたがる。何で起こったのか、どの時間に起きたのかなど、何でもかんでも知りたいという保護者が増えた＞（E 保育者）など、子どもの一挙一動に関する多くの情報を欲する保護者の増加も語られた。＜ケンカしていないですかとか、幼稚園ではどのように過ごしていますか、といったことを心配されてる方が多いと思います…。今までであれば、先生の話をしっかり聞いていますかとか、そのような生活態度だったんですが＞（G 保育者）というように、欲する情報の内容も、より外面的で視覚的なものへと変化しているように思われる。

上述したように、コロナ禍以降、保護者は自分の子どもの「見た目」といった外面的な部分についてより心配するようになった。そしてその心配の解消の手立てとして、子どもに関するできるだけたくさんの「見た目」に関する情報を入手することを切望

していると考えられる。

### (2) 内面が読み取れない不安

一方、子どもの内面的な部分を心配する保護者の増加についての言及はみられなかった。自分の子どもが一人にいるのか、または何人の友達と関わっているのか等の外面的な部分の心配が多く、どのように遊んでいるか、どのようなことができるようになったかといった内面的な内容に関してはほとんど聞かれなかった。しかし、マスクで表情が見えにくくなることは、非言語的および言語的コミュニケーション場面において、保育者と子ども双方に不安感をもたらすことについて高木（2022）が述べているように、コロナ禍以降、子どもの内面についての心配事がなくなったとは考えにくい。

背景に、コロナ禍によるコミュニケーション環境の変化が存在していると考えられる。コロナ感染予防として、密接・密集・密閉に加え、マスク着用が奨励され、私たちを取り巻くコミュニケーション環境は大きく変わった。他者と関わる回数、時間、言葉、そして関わる相手数の減少、他者との距離の増大が生じた。マスク着用のため顔の表情の変化が伝わりにくく、互いの感情や行間も読み取りづらくなった。また、接近したやり取りが憚られるため、身体の細かな動きや息遣いなどから相手の内面を捉えることが難しくなった。このようにコミュニケーション自体への自粛ムードが生じ、他者との物理的のみならず心理的距離も遠くなった。

このような環境下での生活がしばらく続いている影響で、大人も子どももコミュニケーション自体の経験、特に対面でのコミュニケーション経験が乏しくなっていると考えられる。加えて、非言語的コミュニケーションの希薄さが存在するため、他者の

内面的心理的な面を読み取ることが困難になったと思われる。他者や周囲の状況を理解しようとする場合、コロナ禍以前は、言語的情報、非言語的情報、そして今までの自分の経験などを総合して捉えていたが、コロナ禍以降では、非言語的情報と今までのコミュニケーションの経験が減少したため、言語的情報に頼らざるを得なくなってしまった。しかしそれだけでは十分ではないと言える。

私たちはコミュニケーションによって、他者や周囲の状況に関する外面的表面的、そして内面的心理的情報を得ているが、コロナ禍でのコミュニケーション環境の変化により、内面的心理的情報の入手が困難になった。上に挙げたように、子どもの内面についての心配事への言及が見られなかったということは、保護者が自分の子どもの内面的心理的面まで理解することが難しくなったため、具体的な心配事として表出しなかったのではないだろうか。そして、入手困難になった内面的心理的情報を補うものとして、より多くの外面的表面的情報が求められるようになったのではないかと考えられる。

### 3. 子育てに対する不安

#### (1) 自分の子どもが「わからない」

＜職員からの声掛けよりも、他者からの評価に触れて、なんか先生と言ってることが違うけど実際はどうなんですか。タマタマのことを切り取られてしまって、私たちはそんなタマタマのことはわざわざ言わないので。先生の話よりも友達のお母さんからの話の方が優先順位が高くなって、こちらからはわざわざ伝えられないような些細なことを伝えてくれるので、そうすると、先生から、えーそんなの聞いていない...＞  
(G 保育者) という言葉から、子どもに関

してたくさんの外面的表面的情報を収集するが、それらに振り回され混乱している保護者の様子が読み取れる。また、情報の出处やその真偽などより、情報の「数」を求めているようにも見える。さらに＜周りからの評価に惑わされることが割と多いのかな＞(F 保育者) や、＜もし子どもが、今日は誰々ちゃんに意地悪されたんだよ、などというのを聞いたらもうそれしかなくて＞(I 保育者) のように、それら多くの情報ひとつひとつに一喜一憂しているようにも思われる。

また、＜家で大泣きしたりとかトイレの回数が最近多いんですけどか＞(B 保育者)、＜朝の準備の遅さとかご飯を食べないとか、そんなちっちゃなこと＞(C 保育者) など、家庭における心配事も保育者への相談事として挙げられていた。これらも子どもの外面的表面的な様子であり、このような一見些細なことも、保護者にとっては保育者に相談するまで解消できなかったのだと推測される。＜例えば、うちもそうよ、なんてあれば、親もあーそうなんだ、とおしまいになるんだろうけれど＞(B 保育者) の言葉のように、今までは気兼ねなく行われていた井戸端会議のような保護者同士の対面コミュニケーションや、幼稚園等での保育者とのやりとりの場がコロナ禍以降減少し、上のような些細な心配事を解消する機会が得難くなってきたことも背景の一つとして考えられる。

他者を正しく理解するためには、外面的表面的な面だけでなく、その内面的心理的な面も理解することが必要だと思われるが、コロナ禍以降、内面的心理的な面まで理解することが難しくなってしまったことは上でも述べた。それは、保護者の子ども理解についても同様であると考えられる。保護者は自分の子どもを理解したいと思い、多くの情報を集めるが、集まるのは「見た目」

といった外面的表面的な情報ばかりである。そしてそれに振り回され、肝心の内面的心理的な面の理解まで至ることが難しいのではないかと推測される。保護者は自分の子どものことが理解できず、不安が解消されない状態が継続してしまう、という結果につながっているのではないだろうか。＜私がお母さんに近づいて行こうとすると、今日何かありましたかって。親が不安なのかもしれませんね＞（J 保育者）という言葉からも、保護者が、自分の子どもを正しく理解できているのか、また自分の子育てはこれで正しいのだろうかという不安感を常に抱いていることが示唆される。

## （２）保護者自身の安心感のために

一方 A 保育者は、子どもの習い事への保護者の姿勢を語っていた。＜絵がうまいとか足が速いとか、その一つ一つで比べたがるんじゃないかな＞＜何とかさんは何々ができるわよね、とか、絵が上手ねとか＞＜早くから割り振りがっている。何かに特化した子どもに育てたい、一芸に秀でた子どもに育てたい＞など、自分の子どもの内面に潜んでいるであろう、まだ見えない「才能」を、習い事によって具体化、見える化しようと急ぐ保護者の姿がうかがえた。ここでの「才能」の具体化、見える化とは、すなわち、子どもの内面の見えない何かを外面的表面的なものにすることであり、保護者は、理解が困難な子どもの内面について、それを外面的にすることでどうにか理解しようとしていると考えられる。

また、上に挙げた A 保育者の＜早くから割り振りがっている＞という言葉から、できるだけ早く子どもの内面を見える化することで、保護者自身が自分の不安を解消し、加えて＜お子さんが何かで認められる、何かがないといけないという...＞（A 保育者）というように、それを保護者自身の子

育てへの評価とし、安心感を得たいという思いも示唆される。

このような保護者の思いに対して A 保育者は、＜本当だったら全部普通で、それが先になったら、もしかしたらこれがすごいんじゃないかないかって、それを自分で見つけるものだと思うんですけど、親が一生懸命見つけようとしているかなって。そういうのがちょっと不思議だなって。良くなったのか悪くなったのか＞と、子どもの才能は、保護者が一方的に見える化するのではなく、子ども自身が自らの内面と向かい合って見つけるものであるのではないかと危惧している。

このように、子どもの内面的心理的部分を正しく読み取れず、自らの子育てに対する不安を抱き、子どもの才能を「見える化」することで安心感を得ようとする保護者の傾向が本調査を通して示唆された。

## V まとめと今後の課題

本稿では、コロナ禍のコミュニケーション環境の変化が、子育て中の保護者に与える影響について、幼稚園に子どもを通わせている保護者が抱えている心配や不安を、コロナ禍以前と以降に着目して調査検討し、SCAT による分析方法で明らかにしていった。

コロナ禍以降、保護者は、自分の子どもが集団の中にいるか、周囲と同じようにふるまっているか等、子どもの「見た目」である外面的表面的な面に対していっそう敏感になり、子どもに関するできる限りたくさんの外面的表面的な情報を入手しようし、それらに振り回されるようになっていたことが、本調査から示唆された。

コロナ禍におけるコミュニケーション環境の変化によって、非言語的情報が希薄になり、相手の内面的心理的な面の正しい

理解が難しくなり、加えてコミュニケーション自体の経験もコロナ禍以前と比較して減少したと思われる。このことは保護者が自分の子どもを理解しようとする際、子どもの内面的心理的部分についての理解の難しさとして表出し、その理解を補うために、より多くの外面的表面的情報を求めるようになったと考えられる。

また、子どもの内面的心理的部分を正しく読み取ることが困難であるため、自らの子育てに対して不安を抱き、子どもの才能を「見える化」することで安心感を得ようとする保護者の傾向も示唆された。

コロナ禍の影響は数え切れないほど存在すると思われるが、その中でコミュニケーション環境の変化は、子どもから大人まで社会全体に様々な影響を与えていると考えられる。本調査でのインタビューは2022年4月、コロナ禍でのコミュニケーション環境を経験して2年のものであるが、2023年現在ではすでにこの環境で3年過ごしていることになり、よりいっそうの影響が危惧される。特に社会性が発達する幼児期の子どもたちへの影響は計り知れない。

今後も継続して、子ども、保護者、そして両者の関係と、新型コロナウイルス感染症の流行によるコミュニケーション環境について、より注視する必要があると考える。

## 謝辞

インタビュー調査にご協力をいただいたX幼稚園の先生方に心よりお礼を申し上げます。

## 文献

新型コロナウイルス等感染症対策推進室.  
新型コロナウイルス感染症の感染

症法上の位置づけの変更に伴う医療提供体制及び公費支援の見直し等について（令和5年3月10日新型コロナウイルス感染症対策本部決定）

<https://corona.go.jp>

東京都生活文化局広報広聴部広報課.

（2020）. 広報東京都令和2年7月号

毎日新聞社.（2023）. 特集世論調査「マスク着用継続 68% 物価対策評価 13% 毎日新聞世論調査」（2023年3月21日）

<https://mainichi.jp/articles/20230321/ddm/005/010/032000c>

高木麻美子.（2021）. マスク着用とコミュニケーションの継続意欲—子どものコミュニケーション能力発達についての一考察—. 東京保育専門学校研究紀要,3,1-8.

高木麻美子.（2022）. 保育場面におけるマスク着用のコミュニケーションが子どもに与える影響—SCATによる分析を通して—. 東京保育専門学校研究紀要,4,13-22.

篠原 郁子・森口 佑介・利根川 明子.（2022）. 児童生徒の心理、行動、生活の変化と影響. 令和3年度プロジェクト研究報告書「新型コロナウイルス感染症流行下における児童生徒の社会情緒的（非認知）能力をめぐる状況：流行初期に関する文献調査」第1章,7-31.

木村美也子・井出一茂・尾島俊.（2022）. 幼い子を持つ母親のコロナ禍の心理的苦痛とその関連要因：子の育てにくさ、発達不安、ソーシャルサポートおよび受援力に焦点をあて. 日本公衆衛生雑誌,69（4）,273-283.

大谷尚.（2008）. 4ステップコーディング

- による質的データ分析手法 SCAT  
の提案—着手しやすく小規模データ  
にも適用可能な理論化の手続き—.  
名古屋大学大学院教育発達科学研  
究科紀要 (教育科学) ,54 (2) ,27-44.
- Parten,M.B.(1932). Social participation  
among preschool children. *Journal*  
*of Abnormal and Social*  
*Psychology*, 27, 243-269.
- 井上則子.(2009). 子どもの遊びに対する母  
親の意識：母親の属性からみた意識  
の差異. 発育発達研究, 44, 16-23.
- 文部科学省. (2017) . 幼稚園教育要領,  
13-14.

## 〔実践報告〕

### 東京保育専門学校における実習事前学習（2022 年度）について

今井 まり

橋本 萌

岡本 弘子

#### 概要

本校は保育者養成を担う専門学校として、各種実習を最重要科目ととらえ教育活動に取り組んできた。その一環として保育現場に入り現場の実情・実態を知り、保育者（実習生）としての基本姿勢を身に付けるための実習事前学習（体験活動）に取り組んでいる。2022 年度はコロナ禍で数年間実施できなかった実習事前学習を再開し、これまでの取組を再構築しながら、同時に教育的効果について検証した。多くの学生にとって、本取組は、教育実習、保育実習の準備に役立つものであったといえる。

Key word：実習事前学習 教育実習 保育実習 体験活動 保育者養成

#### I はじめに

本校は 90 年を超える歴史をもつ専門学校として懇切丁寧な学生指導を心掛け、保育業界へ責任をもって保育者養成に努めている。本校で学ぶ学生にとって、幼稚園教諭免許状や保育士資格の取得のため、各種実習は最重要科目であるといえる。実習では机上で学ぶことの難しい、乳幼児との関わり、保育者同士の関わり、保育環境、現場の空気感、その他多くの学びが得られ、また同時に自身が専門性を伴った保育者として働くキャリア・イメージを固める機会ともなりうる。このように各種実習は、学生にとって大変貴重な機会であるのだが、実り多き実習とするためには事前の学習が不可欠である。2 年課程の 1 部生では、1 年生の後期に「教育実習 I」の科目指導を行い、1 月に「教育実習 I」を各実習園で指導いただく。保育実習に関しても、1 年生の後期に「保育実習指導 I（2 単位分）」の科目指導の後、2 月に「保育実習 I（保育）」として実習を行っている。各科目指導では専門的指導が行われているが、実際の実習となると、実習

園から多くの指導をいただくこととなる。特に保育の現場の実態に対する無知や、職業意識の欠如といった基本的部分での、指摘をいただくことがあり、実習指導の課題点として、指導方法の改善が模索されていた。そこで、2022 年度は、コロナにより中断を余儀なくされていた、実習事前学習を再開させることを決定した。本校における実習事前学習とは、本実習に行く前の段階で、幼稚園や保育園に半日程度、保育活動を体験することにより、実習をスムーズにスタートするための学習である。今年度は再開に当たって、コロナによる制約もあるため、それまでの指導方法を見直し、新たな形で取り組んだ。本稿は、2022 年度に実施した実習事前学習についての実践をまとめ、今後の実習指導の一助としていきたい考えである。

#### II コロナ以前の実習事前学習の概要

2015 年度より、1 部 1 年生は実習事前学習ボランティア活動を開始した。基本的に

は学生が1年次に行う実習先の幼稚園・保育園に依頼し、実施した。子どもと触れ合い関わってみる、園の一日の流れを知る、保育者の仕事内容を知る、などを目的とした。昼間、保育補助を行い、夜間に授業を受ける2部生とは異なり、1部生は日頃から子どもたちと触れ合う機会が少なく、初年度実習前に少しでも保育現場を体験し、実習園の雰囲気に慣れ、実習に対して戸惑うことなく前向きに取り組めるようにとの主旨で始められた。

2015年度は、幼稚園一日3時間×3日、保育園一日3時間×3日 合計6日間18時間行った。午後から授業が開始される日の午前中に実施した。2016年度以降は、夏休み前の7月に一日6時間×4日、合計24時間実施した。学生の希望により幼稚園、保育園のどちらかで行った。2017年度も同様に行ったが、7月は幼稚園が午前保育で子どもと関わる時間が少ないことから、2018年度以降は保育園のみの体験となった。

以下は実習園での事前学習を終えた学生が、良い学びとなったと述べた事柄である。

○幼稚園と保育園の活動の流れの違いを理解することができた。(2015年度学生の感想)  
○4日間各年齢のクラスを体験することにより、年齢による発達、成長の違いを学ぶことができた。

○保育者の役割について、多くを学ぶことができた。子どもの創造性や想像性を伸ばす関わり、声かけがとても参考になった。子どもの主体性が尊重されていると感じた。室内では遊びによって空間の取り方を変えるなどの工夫があり、環境設定について学ぶことができた。障がい児に対してどの様に対応されているかを学ぶことができた。園庭遊びやお散歩の体験を通して、子どもが自然に興味を持ち、触れ合う機会が多くあると感じた。

○実習事前学習を体験していたので、実際の

実習では不安より楽しみな気持ちで、前向きに子どもたちと向き合うことができた。事前学習で保育者が行う絵本や紙芝居の読み聞かせの様子を拝見し、実習では自分も積極的に読み聞かせを行うことができた。

この実習園での事前学習は、学生にとって大変有意義な体験であったが、その後コロナウィルス感染拡大により残念ながら中止となった。

### Ⅲ 2022年度実習事前学習の指導の流れ

2022年度の実習事前学習の学校側における目的は次の3点である。①教育実習、保育実習に向けて保育現場の実情、実態を知る、②職業意識の形成とそれに伴う保育者（実習生）としての基本姿勢を身に付ける、③実習不安の解消である。

#### (1) 2022年度実習事前学習の概要

コロナにより中断していた実習事前学習の再開を確定したのは、2022年7月の教務会議の場であった。その後、実習指導担当教員からの意見聴取と教務主任を中心とした1年生担当教員の話し合いを経て、概要を決定した。活動時期は、初年度実習のオリエンテーションが開始される12月までに活動を終了させることを意図して、後期開始の10月から11月とした。午前中の活動を体験することを前提に時間を設定した。また、細菌検査を必要としない部分での活動に限定した。

①期間 10月～11月の月曜日の午前

(幼稚園の体験学習1回、保育所の体験学習1回の合計2回)

②活動園

幼稚園：A 幼稚園

保育所：B 保育園／C 保育園／D 保育園／E 保育園

### ③目的

子どもの様子、保育者と子どもの関わりを理解する。

子どもの活動や遊びなど、実際の保育の場に参加して学ぶ。

### ④事前準備

「健康管理票」に、幼稚園または保育所の体験学習を行う 2 週間前から熱を測り、記入する。

### ⑤当日の流れ

<幼稚園>

10:15 集合・着替え・幼稚園に移動開始

\*遅刻や欠席の場合は、学校に当日 9:30 までに連絡する。

\*全員で見学をさせていただく挨拶をする。

10:30 保育見学

11:30 見学終了

\*全員でお礼を伝えて終了、学校に向かう。  
学校到着後、記録と出席簿を作成する。

<保育所>

8:45 集合・保育所に移動開始(保育所に集合、または専門学校前に集合)

\*遅刻や欠席の場合は、学校に当日 8:40 までに連絡する。

\*全員で見学させていただく挨拶をする。

9:00 着替え、保育見学

11:00 保育見学終了

※途中から、専門学校集合で統一した。

## (2) 実習事前学習指導の流れ

初年度実習に臨むにあたり、保育現場の実情を知っておく必要性が、これまで議論されていた。現場を知らないが故の実習不安の解消についても問題となっていた。加えて各種実習巡回、成績評価票の記述などから、実習に臨む基本姿勢を身に付けておくことも課題となっていた。特に「挨拶」、「態度」、「マナー」については、基本とされる部分であり、実習事前学習によって身に付けさせたいと考えた。以下は、実習事前学

習の指導の流れである。

〔実習事前学習の指導の流れ〕

・7月11日(月) HR

初年度実習に向けて実習事前学習で、幼稚園、保育所の体験学習をする旨を学生に伝えた。

・夏休み

体験学習をさせてもらう園にお願いの電話かけ／園と活動内容の調整。

・8月29日(月) HR

実習事前学習の概要説明

【指導①】服装について→エプロンの名札付けを宿題とした。

・9月5日(月) HR

実習事前学習へ体験学習をさせてもらう園の発表。

【指導②】園について→自分の行く園について知る。

・9月16日(金) 試験後に臨時 HR

「実習事前学習 自己チェックシート」の記入。

実習事前学習に行く前の意識調査。

体調管理シートの配布。

・9月21日(水) (救命講習の前後)

実習事前学習、活動時の服装・身だしなみのチェック。

・9月28日(水) HR

実習事前学習開始直前指導

【指導③】態度・マナーについて

・9月29日(木)

実習事前学習に関する意識調査(Google form 9月30日〆切)。

・10月～11月 実習事前学習。

## (3) 実習事前学習に関する指導の要点

実習事前学習実施前の指導は、3点を柱とし、HR(週1回30分)を活用して指導した。

【指導①】について

まず、第一に服装について指導を行った。



活動時のエプロンの用意を最初に取り組み  
せるためであった。

当初、準備させたエプロンを直接チェッ  
クする予定であったが、都合により 1 年 A  
組のみ Google classroom での提出とさせた。  
提出が遅れた学生は直接チェックした。

### 準備 1 (課題)

実習事前学習で使うエプロンを準備しまし  
よう。

①エプロン(無地。キャラクターものは避け  
る)を準備する。

②エプロンに名札を貼り付ける。

フェルト生地(100 均で売っています。)

タテ 10cm×ヨコ 15cm のフェルト生地にマ  
ジックで名前をひらがなで書く。

エプロンの左胸元に縫い付ける。もしく  
は、布用ボンド、アイロン貼り付けフェル  
ト生地也可。



※課題提出時の様子。

エプロンの準備(課題)について説明した  
のち、服装に関する注意事項について伝え  
た。項目を絞り、大切な事項は書き込み式と  
した(末尾に掲載)。

服装については、1 か月後の救命講習の

際、実習用の活動着で受講させることで、活  
動着の適正についてもチェックした。

### 【指導②】について

実習事前学習でお世話になる園について、  
ホームページで事前に下調べをする活動を行  
った。まず、不規則な日程で行われる実習  
事前学習について、自分の活動日、活動時間  
の把握をすることから始めた。一緒に活動  
を行う学生たちの顔合わせも行い、集合場  
所なども確認した。

続いて、園の住所、電話番号といった基礎  
情報を書き取らせ、その後、幼稚園について  
は「園の教育目標(3つ)」、「幼稚園の先生  
たちはどんな先生を目指しているか」につ  
いて、ホームページの記載を書き取らせる  
活動を各自で行った。保育園については、4  
つの園でホームページの記載内容に違いが  
見られることから「対象年齢と定員」、「保育  
理念／保育方針／保育の特色／保育目標等」  
を調べる活動とした。時間も足りなかった  
ため、後日、教員の側から書き取ってほしか  
った情報を一部分まとめ配布している。

### 【指導③】について

今回の実習事前学習のねらいとして、「実  
習に臨む基本姿勢を身につける」ことが課  
題になっていた。保育者を志す学生として  
の態度やマナーについては、以前から、繰り  
返し指導をしてきた。しかし、普通の学生生  
活を送る中で、学生感覚の身だしなみから、  
保育学生としての身だしなみへとシフトチ  
ェンジするのは容易なことではなかった。

実習事前学習としては、まず「夏休みの注  
意事項」の書類に、実習事前学習の際の頭髮  
について明記し意識を促した。

夏休み明けの 8 月末、実習事前学習の目  
的、内容、持ち物、書類、服装を伝える際、  
「保育現場の中心は子ども、場合によっ  
ては見学の際に臨機応変な対応が求められる」

「保育の邪魔にならない言動、見せていた  
だいている意識、子どもを上からみないこ  
と」等も明記した書類を配布し、意識付けが  
できるようにした。服装や持ち物は各園に  
より少し異なるため、それらの比較ができ  
る一覧も配布し伝えた。担任教員としては、  
個別に呼び出しての指導も検討したが、そ  
の前に自覚を促す指導方針とするべきと考  
え、次に基本姿勢 5 項目、態度 3 項目、マ  
ナー 3 項目を明記した「自己チェックシー  
ト」(大項目「基本姿勢」として小項目「頭  
髪(色)／髪形／服装／ズボン／エプロン／  
爪」、大項目「態度」として小項目「挨拶／  
言葉遣い／積極性」、大項目「マナー」と  
して小項目「時間の順守／持ち物／忘れ物／  
提出物」)を用いて指導する時間を持ち、学  
生が自分の状態について考える時間をもつ  
た。また、学生の理解にあいまいな部分があ  
ることが判明したため、全体に対し「出席  
票、健康管理票、実習事前学習の記録」につ  
いて、学生からの質問を基に補足説明も行  
った。

9 月末、全体に対する最終指導の際に、再  
度の確認のため、「実習のねらい、実習先ま  
での経路や時間、必要書類の作成とその受  
け渡し方、持ち物、服装、一緒に実習事前学  
習に行く人の名前、自己紹介の仕方」等 11  
項目について自ら確認するチェック表を用  
い、指導をした。その際、「当日の朝行うこ  
と、保育中の注意事項、当日の終了後に行  
うこと、守秘義務、持ち物」についても再度  
伝えた。

今回の実習事前学習の受入れ先は全て学  
校近隣に位置し、以前から学校とのつなが  
りのある所である。ただコロナ禍である現  
在、受入先の確保は容易ではない。今回は事  
前に教務主任と実習担当教員が保育現場に  
交渉し、受入先が整った。また、受入先決  
定後には教務主任が直接園に出向き、本校  
の指導方針、今回の実習事前学習の意図、学

校における学生の様子等を伝え、当日は「学  
生の挨拶、マナー、服装、頭髪」を確認い  
ただきたいことも依頼した。学生にはこの  
ような手立ての上で今回の機会が設けられ  
ていることと、訪問当日は健康管理票と出  
席票を園側に渡し、挨拶等を園長先生等  
に確認いただくことも伝えている。

#### (4) 実習事前学習実施前の意識調査

実習事前学習が始まる前に準備が整っ  
ているか、意識調査を Google form で行  
った。まず実習事前学習に対する不安感  
を聞いた。そして実際に実習事前学習で  
頑張りたいことを「目標」として考  
えてもらう機会とした。

### IV 幼稚園・保育所での実習事前学習(当日)での学びの内容

#### (1) 学生たちの学び

当日の学びについては、学生たちの提出  
した記録用紙から確認できる。記録用紙  
には、「実習事前学習に関する意識調査(G  
oogle form)」の中で、考えてもらった、「ね  
らい(目標)」を書く欄を設けた。そのほ  
かに「本日の活動内容(何歳児のどのよう  
な活動か)」「実習事前学習で学んだこと  
(幼稚園、保育所の環境、子どもの生活  
や遊びの様子、保育者の子どもへの援助  
・支援の仕方や言葉掛け、その他)」を  
書く欄、末尾には「自分自身の課題・感  
想等」を記入させた。用紙の裏面は白紙  
となっており「\*用紙の裏に、学んだこ  
とを絵や図で書いても良い」とした。提  
出は、実習事前学習を終えた 2 日後の  
HR 時とした。以下は、学生たちの学  
びを抜粋したものである。

【子どもの発達や子どもの生活、遊びを学  
ぶ】

(0 歳児)

・マスカットのおもちゃで遊んでいた 0 歳児クラ

スの男の子が「どうぞ」とそのおもちゃを渡してくれた。私はさやかからとって食べる真似をして「モグモグ、おいしい。ありがとう。はいどうぞ。」と言って返した。それに対して保育者は「甘いね」とマスカットを形容する声かけをしていた。このような声掛けや食べる経験の積み重ねにより、乳児は「甘い」とはどんな味なのかなどを知り、言葉が発達していくのだと思った。(略)子どもたちは先生の問いに答えたり、お友達が言った言葉を真似したりしていた。このようにして発語の発達や語彙の獲得を促しているということが分かった。

・一人の女の子は、自我の芽生えがでてきているのか、ジャンパーを着させようとすると「やいやいやいやい」と嫌がる姿を見せてくれました。なので、その子が着たと思えるよう、手を入れるだけの所までサポートすると満足そうでした。0歳児クラスといえど、1歳の子がいて、また自我があるのも、しっかり学びになりました。

(5歳児)

・今回私は、5歳児を担当したのですが、皆、元気が良く各々が好きな遊びをしていました。担当の保育者に「もし、揉め事が起きても、5歳児は自分たちで何とかするので、見ていてヒートアップするようだったら伝えてください」と言われ、5歳児にもなると自分で解決出来ることに感心しました。先生に何も言われなくても〇時になったら〇〇の時間だと1人1人が時計を見て過ごしていました。席替えをしたのですが、どんな方法でやるかを、保育者が決めずに、子どもたちに、案を出してもらい、いくつかの案の中から多数決で決めていました。保育者が全部決めるのではなく、子どもの意見を聞き、互いに協力し合う形が一番良いと学びました。

学生たちは、子ども達と接することで、子

ども達の世界に触れ、共感し、子ども達の世界を広げる支援・教育の重要性を学ぶことができたと感じる。子ども一人一人の持つ自我を尊重し、自ら伸びようとする力に、必要な場面必要な度合いで手を差し伸べる難しさを学んだことと思う。非常に高度な技術である。今後の実習で、力をつけてほしい部分である。



〔保育者の動きを学ぶ〕

・今回の実習では、子どもの観察をするだけでなく、保育者が行っている保育以外の業務内容や動きを経験することができた。(机の上をアルコールで消毒したり、アクリル板を置いたり、活動しやすいように机、椅子を配置したりした。

〔保育者の声かけを学ぶ〕

保育者の言葉かけは、子ども一人一人の性格を把握し、その場の状況を適切に読み取りながら、発せられる魔法の言葉である。子ども自らが主体的に「できた!」と思えるように誘導するテクニックが詰まっている。

・片付けず放置された本があった時に先生が「K君、新しい先生にその本どこにしまうか教えてあげたら?」というときK君は「いいよ!」と言って私に本をしまう場所を教えてくれて、そのまま本を片付けた。先生の一言で、K君の行動を引き起こしたことがすごいと思い今後

活かそうと思った。

その後、ダンスをやりたくないといった子ども達に対して、この学生は、保育者の声かけを応用したようだ。

「そっか。でも先生あのダンスやったことないから、どうやるのか教えてほしいなあ」と言うと、一人の子が「いいよ～！」と言ってダンスのところに移動した。するとしばらくしてもう一人の子もやってきて、私の側で一緒に教えてくれながらダンスをしてくれた。先生の子どもを自然と動かす声かけを意識して実践できたことは良い経験となった。

・先生の動きを知るといいうのを目標に実習事前学習に臨みました。そこで気が付いたことはやはり子どもたちに問いかけを行っていたことです。授業を受けるだけではわからない言い回しや問いかけを実際に目で見て体験できてとても勉強になりました。自分自身の課題は、製作の時間にも関わらず子どもたちに沢山話しかけてしまったことです。子どもたちの集中力を妨げる行為を行ってしまったことが反省点です。次の実習では反省点を改善し、今回目で見て体験したことを実践していきたいと思いました。

#### 〔失敗から学習する学生〕

実習事前学習は、学生たちにとって成功体験だけをもたらすものではなく、むしろ多くの失敗をしながら学んでいる姿が見えてくる。

・最初にクラスに入った時、緊張しすぎて静かに立ち尽くすことしかできず、子どもの方から声をかけてもらってしまったので、自分から遊びに入って行けなかった部分が反省点。

・(1歳児クラス)おもちゃや絵本の取り合いや、髪の毛を引っ張ってしまうなどのトラブルが目の前でおきたとき、驚いてしまい、すぐに止め

られなかった。そんな時に動揺せずにすぐに止められるようにしたい。

・ある子が靴を左右逆に履いてしまっていることに気づくことが遅れてしまいました。子どもたちの動きや表情などに気を配る必要があったと感じました。

・一つ失敗してしまったことが、公園ですべり台をしている子どもについていた時、階段の一段目を登ろうとしている際に支えているつもりではあったが、他の子どもが来てしまって、その子がしりもちをついて、泣いてしまったことだ。順番だよって教えても分からないことを一瞬忘れてしまっていた。保育者が慌てしまうと子どもにも伝わってしまうんだと分かった。

・一歳児の行動を事前に予習していたにも関わらず子どもがおもちゃを口の中に含んだ時咄嗟の判断ができませんでした。誤飲する心配はありませんでしたが窒息する可能性があったので、すぐ吐き出すよう促すべきでした。命に関わることなので遠慮せず行動に移せるようにします。

・共通の興味を持った子ども同士を繋げる努力は様々な場面で何度もしてみたものの、発展して一緒に遊び始めるといったところまでには至らなかったのももう少し関わり方を模索してみようと思った。

多くの学生に見られた課題点をまとめると以下のような成長の段階があることが確認できる。

- ①立ち尽くしてしまい、積極的に子どもたちと関わるができなかった。
- ②実習生に寄って来てくれる子ばかりと関わり、全体を見ることができなかった。
- ③おもちゃの取り合いや喧嘩などのトラブル場面に遭遇し、対応できなかった。



④突発的な出来事に対応して、安全配慮に努めることができなかった。

⑤特別な支援を必要とする子どもへの対応ができなかった。

⑥集団的な動き（子ども同士の関係性作り）と個別対応（保育者と子どもの関係性作り）

①②③に関しては、教育実習Ⅰ（初年度実習）等で、学びを深めてもらいたい初歩的な課題である。一方④⑤⑥については、高い専門性が求められる。④については日常に潜む乳幼児の事故の危険性を察知する洞察力が必要である。経験がものをいう面もあるが、保育者を目指す学生達にとって必要な力である。⑤は特別支援教育への知識を深め、一人一人に応じた対応が求められる。実習期間内で身に着けることは難しい部分だが、課題意識をもって取り組んでほしい。⑥については、教育実習Ⅱ（責任実習）等において、課題となってくる。集団の動きの中で、子ども達同士の関係性を育み、社会性の萌芽を学ぶことが幼児教育・保育に求められている。同時に保育者との信頼関係を築くことで、安心して集団の中に入る基盤ともなる。自分の課題が見えてくることで、学生が保育者としての専門性を伸ばすことに繋がっていく。これらの気づきは、今後の実習に活かしてもらいたい。



〔職業観形成〕

・子どもと実際に、関わることができ、とても楽しかったです。1日の活動の流れやどのように子どもと関わっているのか、たくさん学ぶことができました。子どもが主体となって、考えることができる保育者の言葉掛けや問いかけは子どもの成長を促すためにとても大切なことだと思いました。人格形成の基礎の培われる重要な時期の子どもと関わることをできるともやりがいのある職業だと改めて感じることができました。

・中学校や高校の頃に職場体験で行ったときとは全く違う視点で先生と子どもの関わり方を見ることができました。職場体験の時は子ども好きのお姉ちゃんとしてでしたが、今回は子どもの発達に先生たちがどのような働きかけや問いかけをしているのか等を見ることができました。（中略）授業で学んだことを少し活用し、保育者の視点で子どもと関わった気がしてうれしかったです。

子どもが好き、子どもが可愛いといった漠然としたイメージで保育者を目指す学生も多い中、実際保育現場に入ること、職業としての「保育」というものを実感する機会になったと考えられる。学生たちが、専門性をもった「保育者の視点」で子どもの育ちを支えることのできる保育者に成長できるよう、実習事前学習の更なる活用が求められる。

## （2）実習事前学習中の様子と指導

今回の実習事前学習は、今後の実習に向かう準備の段階である。今後の実習に前向きに取り組めるよう、園側から「挨拶、マナー、服装、頭髪」に「良」というサインをもらってきてほしいという思いから、毎朝身だしなみや持ち物の確認、挨拶の仕方について声掛けをする等の支援をした。

多くの学生が、着なれない服や靴を身に

つけ、初めて行く保育現場に緊張しながらも真面目に参加する様子が見られた。また、保育現場から戻ってきた際には、初めてのことに戸惑いながらも「今日行けてよかった」という語る学生が多いことを確認した。しかし、「健康管理票を毎日記録すること」「指定された持ち物を持ってくること」「時間を守ること」「終了後は直ちに学校に戻ること」という約束を守れない言動の学生も確認された。そのため、学生の意識を高めるには前日と当日の個別指導も必要と判断し、当初は駅に近い場所に位置する2か所の保育所は集合場所を駅としていたが、「全園とも学校に集合する」と変更した。また、「実習事前学習に行く前の週の金曜日に、各園の集合時間、見学開始時間、見学終了時間、持ち物、服装についてチェックする当日チェック表を配布しながら声がけをする」という指導も行い、当日はそのチェック表を持参し、教員に提出しながら指導を受けることにした。

一連の指導は保育現場に立つ自覚をもたせたいとの考えから行ったものであったが、少しずつ教員からの指導は減り、自らの課題に気づける学生が増えたことが確認された。

## V 実習事前学習後のまとめと事後アンケート

実習事前学習の全日程終了後に、HR時に今回の実習事前学習での学びを、クラスメートと交流する機会を設けた。各自の記録用紙をもとに、話し合いを行った。その後アンケート調査を実施した。Google formで9つの項目について回答を求めた。57件の回答が得られた。

### 【9つの項目】

(1) 実習事前学習に、実習生としてふさわしい①基本姿勢・②態度・③マナーで取り組め

ましたか。

(選択肢)

実習生としてふさわしい基本姿勢・態度・マナーで取り組めた。

実習生としてふさわしい基本姿勢・態度・マナーで取り組めなかった。

<回答結果>

98%が、「実習生としてふさわしい基本姿勢・態度・マナーで取り組めた。」と自己を振り返っている。

(2) ①②③で自分に課題があると感じている場合は、「その他」の欄に具体的にどこが課題か書き入れましょう。

(問(1)に付随して、①基本姿勢、②態度、③マナーについて聞いた。98%がふさわしい基本姿勢・態度・マナーで取り組めたと回答したため、回答結果は省略。)

(3) 幼稚園・保育所の実習事前学習は、教育実習、保育実習の準備に役立ちましたか。

(選択肢)とても役に立った／役に立った／役に立たなかった／どちらでもない

<回答結果>

とても役に立った(70.2%)、役にたった(28.1%)となり、回答者にとっては、有意義な活動となったことが想像される。一方で回答をしなかった約20名の学生にとっては、今回の活動が役立たないと感じた可能性が残る。

(4) 実習事前学習のどのような内容が、役に立ったと思いますか。以下の中からすべて選択してください。他にもある場合は、その他に記載して下さい。

(選択肢)

子どもとの関わりや発達を学べたこと／(39票)

保育者と子どもとの関わりを学べたこと／(40票)

保育環境について学べたこと／(34票)

保育活動に参加し、子どもと実際に遊べたこ

と／(38 票)

保育者という職業について、意識を深められたこと／(17 票)

これからの実習について、イメージを持てたこと／(25 票)

＜回答結果＞

「子どもとの関わりや発達を学べたこと」  
／「保育者と子どもとの関わりを学べたこと」  
／「保育活動に参加し、子どもと実際に遊べたこと」は多くの学生にとって役に立ったと感じているようだった。この中では「保育者という職業について、意識を深められたこと」に意義を感じた学生は少なかった。今回の実習事前学習では、職業観を深めるところまでは到達が難しいことがわかる。

(5) 幼稚園・保育所の実習事前学習を終えて、保育の仕事に対する印象に変化はありましたか。

(選択肢)

保育の仕事に関する印象が変わった。  
(42.9%)

保育の仕事に関する印象は変わらない。  
(57.1%)

(6) 実習事前学習を終えて、保育の仕事に対して、どういった印象になりましたか。

＜回答結果＞

問 (5) と合わせて、印象が変わったと選択した学生の中の少くない人数が「大変な職業」という印象を抱いていた。「安全」に配慮し、「命」を預かる仕事でありながら、時間のなさ、「子どもが好きだけではやっていけない仕事」という思いを吐露している。そうした中でも、「子どもとただ関わるだけでなく、子ども同士を繋げる大切な役割だと改めて感じました」や「事前学習の前はただ子供を保育することが仕事だと思っていたが、事前学習を終えて子どもの成長に気

づいたり、喜べたりする素晴らしい職業だと思った」との思いを抱く学生もいた。大変さ、難しさに気づいた上で「やりがい」を感じている様子もある。

(7) 幼稚園・保育所の実習事前学習を終えて、教育実習、保育実習に対する不安は、どう変化しましたか。

(選択肢)

実施以前より不安が増した (50.9%)

実施以前より不安が減った (24.6%)

実習事前学習は、本実習への不安に影響していない (24.6%)

＜回答結果＞

今回の実習事前学習は、実習不安の解消についても、目的意識を持って取り組んできたのだが、実習事前学習が実習不安の解消には繋がらないことがわかる。一部の学生には、不安の軽減につながったようではあるが、多くの場合、保育現場の状況を知ること、不安を増大する結果となった。ただし、こうした結果を一概に問題視してはいない。現実を知り、正しく恐れ、それに備えるという姿勢を育むべきであると考えている。

(8) 教育実習、保育実習の何に対して一番不安を感じますか。

(選択肢)

身だしなみや持ち物などの基本的な姿勢(0%)

保育実践(子どもとの関わり)(21.8%)

保育者との関わり(21.8%)

保護者との関わり(7.3%)

保育現場の空気感(5.5%)

日誌や指導案の書き方(41.8%)

その他 (上記全部)

＜回答結果＞

最も多かったのは「日誌や指導案の書き方」であった。今後の教育実習、保育実習の指導を受けることでこれらの不安が軽減さ

れるように努める必要がある。

#### (9) 教育実習・保育実習で課題意識をもって取り組みたいことを書きましょう。

最後の質問は、実習事前学習を終えて、教育実習Ⅰ、保育実習Ⅰに意識を向けるための質問であった。

### Ⅵ まとめ 今後の課題

2022 年度の実習事前学習の学校側における目的は、①教育実習、保育実習に向けて保育現場の実情、実態を知る、②職業意識の形成とそれに伴う保育者(実習生)としての基本姿勢を身に付ける、③実習不安の解消であった。そこで、学生たちに保育現場で半日程度の体験学習に取り組ませ、①子どもの様子、保育者と子どもの関わりを理解する、②子どもの活動や遊びなど、実際の保育の場に参加して学ぶことを目的に一連の指導を行ってきた。

学生たちは、短い時間ではあるものの、保育現場の実態を知るいい機会を得られたことと思う。事後のアンケートからは、教育実習、保育実習の準備に、「とても役に立った」、「役に立った」を合わせて 98.3% (回答率 74%) が役立ったと述べている。また、本実習ではないといえども、保育現場に入って体験をさせていただくにあたり、保育者(実習生)としての服装、マナー・態度、園に対する基礎的な知識は、HR を使って丁寧に指導してきた。実際、保育現場で保育者の眼をもって指摘された事項は、学校で指摘される以上の効果があったと考えられる。職業観の形成については、今回の実習事前学習のみでは難しいものの、今後の実習を重ねながら保育者という仕事の理解を深めていてもらいたい。実習不安の軽減については、実習事前学習が、不安の軽減に作用しなかったということが、今回のアンケートから見えてくる。保育現場の実態を知り、

不安を深めた学生もいた。ただ、漠然とした不安から、正しく恐れ準備する姿勢を育むようにつなげていければよいと考える。実習不安の軽減については、今後も検討すべき課題である。

記録用紙に記載された内容からは、実習生の課題点が、幾層にも重なり、実習生としての成長の段階があることを浮かび上がらせた。一人一人の学生の「実習生としての課題点」を判断し、適切な指導につなげる必要がある。

保育者の専門性が議論されている<sup>1</sup>今日において、保育学生が実習内で見せる成長は、保育者としての専門性を理解する一助となるだろう。ひいては、保育者養成校が目指すべき保育者像をも再考することにつながる。「実習生としての課題点」の精緻化は今後の課題としたい。

### おわりに

本校の教職員は「育ての心」を持って教育活動に従事している。学生の「学ぼう」、「伸びよう」とする力に適切な機会を与え、サポートを行ってきた。

毎回、実習事前学習へ送り出すにあたって、1 年担任は服装・持ち物・書類のチェックなど丁寧な指導を心掛けた。基本的な部分で課題が見られた学生にも根気強く支援した。

学生たちにもたらさせた、大きな収穫は実習事前学習の申し出を快諾下さり、学生たちを教え導いて下さった幼稚園と 4 か所の保育園のご協力なしには叶わなかった。この場を借りて御礼申し上げたい。



### 服装に関するお約束

- ①通勤時はスーツ（入学式に着たもの）を着用。\_\_\_\_\_の配慮から着替えが必要。
- ②アクセサリは禁止。（透明ピアスも！\_\_\_\_\_の危険性があります。）
- ③髪は染めず自然な黒。前髪は目にかからないように。長い髪はゴムで結びましょう。男性は、長い髪は不可。清潔感のあるヘアスタイルにしましょう。ヒゲも剃ります。
- ④\_\_\_\_\_は短く切っておきましょう。
- ⑤お化粧は薄化粧にとどめ、香水などはつけないように。
- ⑥\_\_\_\_\_のある服装が大切です。ポロシャツ・もしくはTシャツ（無地）、ズボンはチノパン。フード付きの服は不可。デニムジーンズは不可。穴の開いている、裾のほつれ等のデザインなども不可。胸元や股上の部分から素肌がみえることがないように気を付けましょう。
- ⑦外履きのスニーカーを持参。\_\_\_\_\_も持参してください。

※【指導①】について

---

<sup>1</sup> 吉田直哉 鈴木康弘、安部高太朗「保育者の「専門性」の構造的把握をめぐる諸問題」『敬神・研究ジャーナル』（2018年2巻2号 81-89頁）

## 実践報告会についての報告

東京保育専門学校教職員

2023年2月27日午後2時から4時まで東京保育専門学校本館会議室で実践報告会が行われた。専任教員橋本萌による「『実践報告』東京保育専門学校における実習事前学習（2022年度）について」（本紀要 pp. 12-23 に掲載）と専任教員平山裕子による「指導案作成の考え方とその方法：子ども主体の指導計画」の報告が行われた<sup>1</sup>。出席者は、教務部9名、管理部2名であった。

「『実践報告』東京保育専門学校における実習事前学習（2022年度）について」の報告後、教務部の伊藤が、実習事前学習がコロナ禍によって中断されたことによる学生の混乱と、2022年度の実習事前学習の成果について次のように発言した。

「今回の『実践報告・東京保育専門学校における実習事前学習』の報告を拝聴させていただき、思うところを述べてみたいと思います。

3年前からのコロナ禍では、『実習事前学習』は中止となりましたが、本実習の前に子どもの様子（遊び）や保育者と子どもの関わりを理解すると共に、保育現場の実情・実態を知り、更に職業意識を高めることが絶対に必要であるという考えから、個人ごとに実習期間をずらしながらも実際の現場での実習が望ましいということになりま

しました。

このことから、学校内でもオンライン授業による実習指導を丁寧に行いましたが、学生自身の不安は拭えなかったのではないかと感じています。

実際コロナ禍での実習がスタートすると、特に開始初期の段階で、学生からの電話が連日鳴り響きました。電話の内容は、根本的な情報の不足や思っていたイメージとの相違、自信がない、続けられないといった内容が多かったように思います。加えて、実習前の学校への登校もままならなかったことからコミュニケーション不足に陥り（友達と話し合うこともできず）、実習への不安が増し、更には孤立する学生も発生したのではないかと考えています。なかには実習を機に休学や退学といった状況に陥った学生もいました。

このような状況を踏まえ、2022年度においては絶対に『実習事前学習』の復活が重要であるとの認識で今回の再開に至ったのです。

以前より少ない期間とはいえ事前学習を行ったことで、実際の乳幼児との関わりや保育者同士の関わり、保育環境といった内容を友達同士で情報交換するといったことも可能になったため、不安の解消に少なからず寄与したと考えています。当然、実習への不安や疑問点などを、担当の先生に直

<sup>1</sup> 報告後、活発な意見が交わされた。以下の発言記録は、発言者が当日の発言を文章化したものを、当日司会を務めた紀要編集

委員の大須賀が発言の形に加筆修正し、それを再度発言者に戻し確認のうえで掲載している。

接会って聞くこともでき、心と実践の準備をしっかりと踏まえた上で実習に出られたのではないのでしょうか。また、実際の乳幼児との関わりや保育者同士の関わりから『楽しい』『可愛い』を感じてもらうことが出来、保育という職に、より親近感を抱き、保育の世界の定着に繋がられたのではないかと感じています。

なお、2022年度においては、この『実習事前学習』の効果で、本実習でつまずく学生は殆ど発生しませんでした。コロナ禍において、連日学校の電話が鳴り響いた状況が嘘のように感じられたのは、私一人だけではなかったように思われます」。

伊藤の発言に対して、教務部の大須賀も次のように発言をした。

「実習の基本である、無断遅刻、無断欠席、提出書類を期限通りに出さない、といったことで実習園からお電話をいただくことは皆無であったと思います。また、実習巡回に行くと、どの実習生も挨拶がしっかり出来ることを褒めていただきました」。

次に、教務部の三室から次のような質問があった。

「コロナ禍で中断されていた実習事前学習を1年担当の先生方が復活させて、きめ細やかな学生指導と園での貴重な体験学習を実施出来て、とても意義深いと感じました。そこで気になったのは、実習事前学習を終えた後のアンケートで、実習に対する不安を増した学生が過半数を超えています。この状況はどのように理解すればよろしいでしょうか」。

それに対して、実習事前学習を1年担当教員と共に指導にあたった教務部長今井は次のように回答した。

「コロナ禍での実習事前学習のため、教育実習事前学習が1回、保育実習事前学習

が1回と最小回数での実施でしたので、実習不安が全て解消されるところまではいかなかったと思います。コロナ禍以前は、5回前後、実習事前学習に出していたので、実習不安はかなり解消されていたと思います」。



図1 橋本による報告<sup>2</sup>

さて、同報告の中に「失敗から学習する学生」という見出しがある。司会者の大須賀は、同報告の見出しの中では異質な印象を受けたので、報告者の橋本にその意図について尋ねた。それを受けて橋本は、教育実習担当の平山と保育実習担当の近山に「失敗から学習する学生」についての意見を求めた。

まず、教育実習担当の平山が、次のような意見を述べた。

「保育者養成校における実習に向けての指導は、多岐にわたっており学習や生活に対する姿勢や態度等にも指導が必要となってきます。本校での実習事前学習が、現場の実情や実態を知ること、職業意識の形成、そして実習不安の解消につながることを目的として行われていることは、大変有意義な機会となっていると考えます。

実習は保育職を生涯の仕事として選択するかどうか、進路意識を変容させる契機と

<sup>2</sup> 図1-3の写真撮影は三室絵梨子による。

なることも多くの先行研究で報告されていますが、一方で実習が学生に与える心理的不安は大きく、活動内容に何らかの不安を抱いていることも明らかです。このようなことから、実習前に学生の不安を把握し、一人でも多くの学生が効果的な実習経験をし、自己効力感を高め、保育者への志向性を高めるために、実習事前学習で不安を軽減できるような支援を行うことの重要性は高いと考えられます。

今回の実習事前学習後のアンケートによると、保育の仕事に対する大変さに気づくことができ、やりがいのある仕事と捉えることができた学生が多くいる一方、実施以前より不安が増した学生が半数いることも明らかになり、興味深い結果となりました。不安解消のために行った事前学習が、かえって不安を増したことになっています。保育という仕事の大変さを目の当たりし、自分にはできるのだろうかといった感情を抱くこと等、事前学習に高い意識をもって取り組んだ結果とも言えるのではないかと考えます。また、不安内容の多くが日誌や指導案の書き方を挙げていますが、実習中最大の課題とも言えるほど学生にとって困難なのが日誌や指導案です。これらの不安解消のため、実習の授業においては今後も益々重点的に行う必要があると考えます。

また、今回の実習事前学習において学生は多くの失敗をし、そこから学んでいる姿が見られることも明らかとなったと述べられています。本報告において「失敗から学習する学生」と述べられているように、失敗は必ずしもマイナスなことばかりではないと言えます。実習の目的の一つに、「課題の自覚」があるように、実習は完璧にこなすことが目的ではないと言われています。どんなに準備を行ったとしてもうまくいかないことがあり失敗することがあります。失敗を恐れず成長のチャンスだと考えるこ

と、そこから課題を自覚し、省察することで将来保育者になるうえでの能力や適性を考える機会と捉えてほしいと思います。実際、学生の多くが失敗を恐れている傾向があります。失敗から学び、次に活かそうとする力が身につくような環境を提供することも必要であると考えます。

最後に、保育者養成校においては、安心して実習に臨めるサポート体制を整える必要があります。本校においても実習事前学習をはじめとし実習中、実習後と不安や悩みに対して支援を行っています。今後も必要に応じて個別のサポートを行うなど、より一層の工夫が求められる等、個々の学生に対応した支援を検討する必要があるでしょう」。



図2 平山による報告

次に、保育・施設実習担当の近山が次のように述べた。

「この間のコロナ禍の中で、本来学校が行ってきた体験学習を行うことができずじまりました。体験学習の必要性を十分理解しつつも行えないという残念な思いのままきた3年間でした。

資格習得のために5回の実習が在学年数の中で行われるわけですが、実習の実施にあたりましては、コロナ禍でも、教員及びほかの職員の力をもらい実習先の確保を行い、実習を実施することが出来ました。し

かし、高校を卒業してこの学校の門を叩いた学生の志の中の『子どもが大好きです』の気持ちを実習前に実感するということは、現場をお借りして関わりを持ちさらに楽しさや関わることの大切さを知ることがこの上ない実体験になります。

体験場所の確保や実施時間のやりくりをした後で、事前の準備を HR の中で行うことがクラス担当職員によりできました。本当に学生にとってよい動きの体験になったことと思っています。

実施できたことにより、課題も見つかりました。まず、学生がより良く実習ができるためにはどのような工夫が必要かということです。只今の報告をお聴きすると、学生の弱点もわかり、これから実習に出すにあたり、準備などの足掛かりとなりました。実習時において多少の緊張が日々あるものの、やりやすい実習を目指したいものです。

体験実習の後で行っていく実習においては、実習先だけではなく、学生にとってもわかりやすい実習の手引き作成のために見直しをさらに行いたいと思っています。さらに、実習録を記入することに慣れない学生に対して記入方法をどのように学ばせていくか、そして、実習録の記入項目の見直しを行うことで、記入しやすい実習録にならないかなどこれから見直しを行っていきたいと考えています」。

三室は、「失敗から学習する学生」について、次のような見解を述べた。

「一口に実習における〔失敗〕と言っても、2種類あるのではないのでしょうか。1つは養成校で学習していなければならない内容が学習されないまま実習に出たことによる失敗、もう1つは養成校で学習した発達や指導法を活かした遊びなどを実習現場に出て試してみたがうまくいかなかったという失敗です。

例えば、前者は、学校でピアスやネック

レスなどの装飾品は実習に着けていかないと指導を受けていたにも関わらず、ピアスを着けて実習に出てしまい、子どもたちと砂場で夢中になって遊んでいる間に、ピアスが外れて砂場に落ちてしまい、ピアスのピンが子どもの手に刺さって怪我をさせてしまった場合の失敗です。後者は、実習園の子どもたちの遊びが停滞していたので、学校で学習した新しい鬼ごっこを提案したところ、鬼ごっこのルールを理解できる子どもとできない子どもとでいざこざが起きてしまった、これなどはチャレンジすることによる失敗と言えるのではないのでしょうか。

後者の場合、新しい鬼ごっこのルールを理解できた子どもにとっては新たな学習ができたわけですし、いざこざが起きること自体は子どもたちにとっては人間関係のひとつの経験ですから〔失敗〕ではないし、実習生にとっては、学校で学んだことを実際に子どもたちに教えたところ上手く伝えきれない点があったことが反省点であるので、まさに〔失敗から学習する〕機会を得たわけです。しかし、前者の場合、学校も実習生も避けなければならない、予防しなくてはならない〔失敗〕です」。



図3 参加者による質問場面

最後に、管理部の柿崎が、本実践報告会を次のように総括した。



「多忙な中、このような報告会を開催していただき、感謝申し上げます。実践報告会という、我々事務部門は関係無いことのように思われることもありますが、事務部門も含めた全職員が主要事業である教育活動の内容や教育目標、教育課題などを知り、共有し、それぞれにその意味を考えることで、それぞれの業務に還元できることが多くあると考えます。

また、昨今は高等教育機関における教育の質保証のための制度ができ、その基準をクリアすることが専門学校にも求められてきています。このような流れの中で、職業実践専門課程や高等教育の修学支援新制度の認定を受けている本校においても、全職員を巻き込んだ組織的な教育内容の質改善、質保証に取り組むことが必要であり、その一つとしても今回の実践報告会のような研修会の実施は重要性が増していると考えています。

橋本教員の『「実践報告」東京保育専門学校における実習事前学習（2022年度）について』の発表について、実習事前学習のねらい、準備、結果と効果について学生アンケートによる定量的、定性的検証を踏まえた報告があり、その意義と教育的課題について知ることができました。来年度に向けた取り組みにより、課題が改善することが期待できると感じました。

平山教員の『指導案作成の考え方とその方法：子ども主体の指導計画』<sup>3</sup>の発表について、教育実習の事前指導や実習本番における現状の指導内容、学生の課題点について報告があり、その意義と教育的課題について知ることができました。特に、現場が求めるレベルと学生が思い描く実習のレベルに相違があるケースで、学生が困難を

感じる場面が見られるとの内容について、実習先との連絡、連携体制の見直しや強化が必要であることを理解しました。来年度での改善の取り組みに期待したいと思います。

ただ、研修を実施するだけでなく、そこからどう具体的な課題解決を行っていくのかが一般に求められるところです。ぜひ、継続して次年度以降も実施していただき、また参加させていただきたいと思います」。

以上が、「実践報告会についての報告」である。

今回の「実践報告会」で見えてきた方向性は、柿崎の「現場が求めるレベルと学生が思い描く実習のレベルに相違があるケースで、学生が困難を感じる場面が見られるとの内容について、実習先との連絡、連携体制の見直しや強化が必要であることを理解しました」という発言にあるように、先ずは、実習現場と養成校との情報共有の場をもつことである。個々の実習現場が求める実習生像や実習力の具体(乳幼児とのかかわり合い、観察と記録、指導案作成、実践力など)を聴き、養成校からは、現在の学生の基本的なソーシャルスキル・観察記録力・指導案作成力・メンタルヘルスなどについて伝える。

そうした実習現場との情報共有を踏まえた実習指導が実現できるように、教務部では、実習指導担当教員を中心に、教務主事、学年担当教員、スクールカウンセラーが協力し合って取り組んでいきたい。

---

<sup>3</sup> 指導案作成についての実践報告は、次号以降の紀要への投稿に期待したい。

## 【実践報告】

### 2022 年度「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究について

今井まり 高木麻美子 三室絵梨子 橋本 萌 大須賀隆子 岡本弘子

#### 概要

東京保育専門学校「保育・教職実践演習」の中心的な取組みであるグループ卒業研究についての実践報告である。グループ卒業研究は、保育者（幼稚園教諭・保育士）になるための専門科目と5つの実習体験とを振り返り、問題意識をもって協働研究（グループ卒業研究）に取り組み、専門科目知と実習知とをつなげて実践知に近づくことをめざしている。実践知に近づくグループ卒業研究になるように、実習体験を活かす研究方法を提示した。その成果を、2022 年度「保育・教職実践演習」履修生によるグループ卒業研究の実践によって示した。

Key word：保育・教職実践演習 実習体験 グループ卒業研究 研究方法 研究の背景

#### 1. 「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究の位置づけ<sup>1</sup>

「保育・教職実践演習」は、幼稚園教諭資格と保育士資格を取得するための最後の出口となる科目であり、卒業後に就く保育現場に直結する入口となる科目でもある。

第1回で、筆頭教員の今井は、本演習の目的について、学生に次のように伝えた。

「保育・教職実践演習では、保育者（幼稚園教諭・保育士）として①使命感や教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③乳幼児への理解力と援助技術、④保育内容の指導計画力と実践力、⑤保護者対応などの資質能力が修得できているかどうかを確かめながら一層の向上に努めていきます」。

今井が伝えたように、「保育・教職実践演習」は、学生が卒業後に入職する保育現場で新米保育者としての基本となる資質能力を培うことをめざしている。東京保育専門学校 1 部（昼間部）では、「保育・教職実践演習」を2年次後期に履修する。その授業計画（シラバス）は以下の通りである。

表1 東京保育専門学校「保育・教職実践演習」授業計画（シラバス）

| 回数 | テーマ       | 内容                                                                                 | 準備学習                   |
|----|-----------|------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|
| 1  | オリエンテーション | ・本科目の趣旨・授業計画・履修カルテについて<br>・履修カルテをもとに、これまでの授業・実習を通じて学んだことを振り返り、自己の課題や興味のあるテーマを選択する。 | 実習日誌が手元にある<br>学生は持参する。 |

<sup>1</sup> 2022 年度「保育・教職実践演習」の担当教員は齊藤一美、今井まり、高木麻美子、三室絵梨子、橋本萌、大須賀隆子、岡本弘子である。なお、岡本は、海外の保育や乳児保育をテーマにしてグループ卒業研究に取り組んでいる学生グループの指導に当たった。

|    |                     |                                                                                     |                                                      |
|----|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 2  | グループの編成<br>テーマの設定   | ・グループを編成し、集団の討議を通じてこれまでの<br>学びを整理してまとめ、主題を明確にする。<br>・調査に関する倫理的配慮や研究調査方法の説明を<br>受ける。 | グループで中心にした<br>いテーマを明確にする<br>ため、必要な文献や情<br>報があれば準備する。 |
| 3  | グループワーク             | ・より具体的に主題に関する内容を話し合い、どのよ<br>うに調査、情報収集を行っていくか方向性を決める。                                |                                                      |
| 4  | グループワーク             | ・アンケート文やインタビュー内容などの試案を作<br>成するなど、調査、研究を深める。                                         |                                                      |
| 5  | 中間報告会               | ・各グループごとに研究の目的を発表し、現在の研究<br>状況を報告する。報告の後に教員および学生から質<br>問や助言を受ける。                    |                                                      |
| 6  | 保護者対応と理解            | ・保育者が保護者対応を行う場面を想定し、ロールプ<br>レーイングを通して、保護者理解を深める。                                    |                                                      |
| 7  | グループワーク             | ・中間報告会から集まった助言と自己省察を踏まえ<br>て、最終発表に向けた計画を見直し、改めて主題を<br>明確にする。                        |                                                      |
| 8  | グループワーク             | ・最終発表に向けて、調査、研究を深める。                                                                |                                                      |
| 9  | グループワーク             | ・最終発表に向けて、調査、研究を深める。                                                                |                                                      |
| 10 | グループワーク             | ・最終発表に向けて、調査、研究を深める。                                                                |                                                      |
| 11 | グループワーク             | ・最終発表に向けて、調査、研究を深める。                                                                |                                                      |
| 12 | グループワーク             | ・最終発表のスライドおよび原稿を完成させる。発<br>表方法を確認し、配布資料がある場合は提出する。                                  |                                                      |
| 13 | 研究結果報告会<br>(前半グループ) | ・これまでの研究成果を発表する。<br>・他のグループ発表を聞き、研究結果報告会レポート<br>に感想を記入する。                           |                                                      |
| 14 | 研究結果報告会<br>(後半グループ) | ・これまでの研究成果を発表する。<br>・他のグループ発表を聞き、研究結果報告会レポート<br>に感想を記入する。                           |                                                      |
| 15 | 最終授業                | ・保育者として必要な資質能力を確認し、個人として<br>改善・努力すべき点についてレポートにまとめる。                                 |                                                      |

本報告のグループ卒業研究は、上記シラバスにあるように全 15 回のうち 12 回を占めている。つまり、グループ卒業研究は本演習の目的を実現するための中心となる取り組みである。

第 1 回で、学生は、履修カルテと実習録を通してこれまでの学びを振り返り、自己課題を明らかにした。そして、第 2 回から具体的にに取り組むグループ卒業研究に向けて、学生たちの自己課題につながり、かつ興味・関心のある研究テーマを考えるための手がかりとなるよ



うに、表2のように10項目が示された。

表2 研究テーマを考えるための手がかりとしての10項目

- ① 実習を通じた学びや課題
- ② 保育の方法・形態
- ③ 子どもの発達
- ④ 子どもの遊び
- ⑤ 安全と健康・保健
- ⑥ 気になる子ども・子どもの心理
- ⑦ 乳児保育
- ⑧ 保育者の職務
- ⑨ 子育て支援
- ⑩ その他（諸外国の保育）

第2回では、グループ卒業研究の位置づけについて、図1を示しながら2年担当の大須賀が次のように話した。

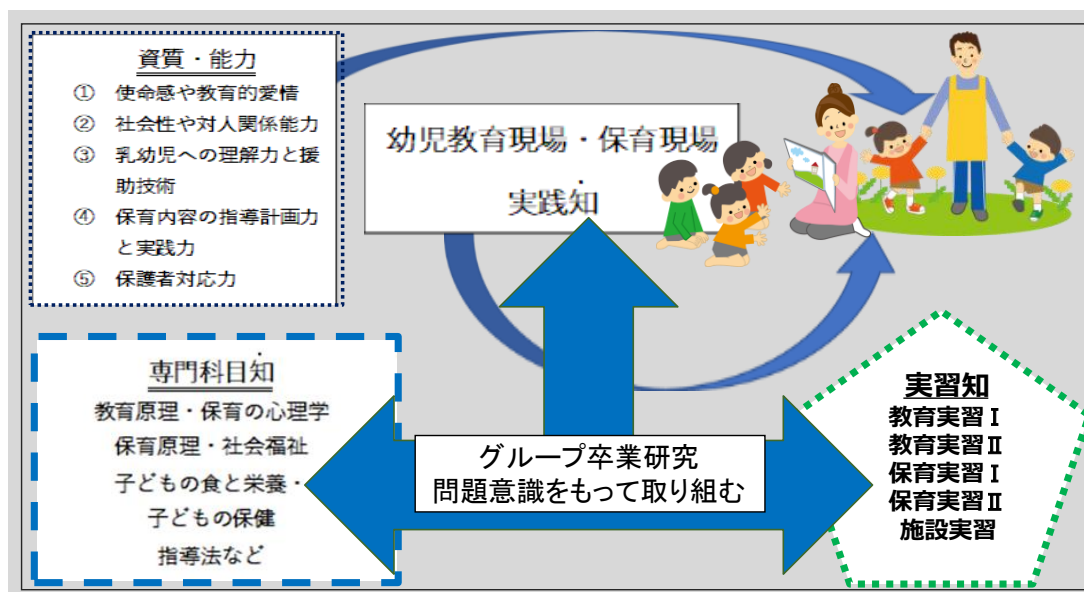


図1 「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究の位置づけ

「半年後に向かう幼児教育・保育現場で自信をもって実践をスタートできるように、これまで保育者（幼稚園教諭・保育士）に成るために学んできた専門科目と5つの実習（教育実

習Ⅰ・教育実習Ⅱ・保育実習Ⅰ・保育実習Ⅱ・施設実習<sup>2)</sup>を通して学んできた内容とを振り返り、問題意識をもって協働研究（グループ卒業研究）に取り組み、専門科目知と実習知とをつなげて実践知に近づいていけるように取り組んでいきましょう」。

第2回では、2年担当の三室が、学生に自己課題につながる研究テーマや興味関心のある研究テーマを付箋に記入するように伝えた。そして、研究テーマを考えるための手がかりとなる各10項目が記されている10枚の模造紙に各自が付箋を貼り付けることによってグループ編成を行うように伝えた。1部は2クラスあるが、各クラスとも各項目ごとに3～5名前後が集まってひとつのグループをつくった。学生同士は入学以来1年半の付き合いがあるので、一人ひとりが自分自身の研究テーマを大事にしながらも、全12回に及ぶ卒業研究グループワークを協力して取り組んでいけるように、グループづくりは学生同士で調整していったようである。

なお、表2の10項目は、第1回で今井が伝えた5つの資質能力の①③④⑤を具体化している。②社会性や対人関係能力は、全12回のグループ卒業研究の取組みの過程で役割分担や話し合いを通して身につけていくことが期待される。

## 2. グループ卒業研究のテーマ設定と研究方法

第2回では、グループ卒業研究のグループ編成の前に、「研究テーマ設定と研究方法」、「研究倫理」、「研究結果報告会の実際」について伝えた。

「研究テーマ設定と研究方法」については、大須賀が伝えた。まず研究の型式について説明し、次に研究具体例を示すことによって学生がグループ卒業研究を実感をもって捉えることをめざした。

「研究倫理」については、基本的人権への配慮、研究協力者への配慮、情報管理の厳守、研究上の禁止事項などを中心に橋本が説いた。「研究結果報告会の実際」は、学生が研究という未知なる体験について具体的なイメージがもてるように、昨年の研究結果報告会の映像記録を使って高木が伝えた。

「研究テーマ設定と研究方法」であるが、「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究という点に配慮した提示であったので、以下にその配慮について詳述する。

「保育・教職実践演習」の取組みの一環として、ある短期大学では、卒業年の1月に「実習報告会」を行っている。5つの実習園の中から、学生たちが印象的な体験や有意義な学びをすることができた幼稚園、保育所もしくは施設のいずれかひとつを選び、2人から4人前後の学生がひとつのグループをつくって、具体的にどのような体験や学びをすることがで

---

<sup>2)</sup> 施設実習は正式には保育実習Ⅰの中に含まれる。保育実習Ⅰは保育所実習と保育所以外  
の福祉施設における実習を含む。後者の、保育所以外の福祉施設における実習を施設実習  
と呼んでいる。

きたかを発表する。聴衆は、5つの実習を修了した2年生とこれから実習が始まる1年生の学生たちである。2年生は、自分が実習した場所とは異なる幼稚園、保育所、施設での実習体験や学びを聴くことによって、自分自身の体験や学びが相対化され、新たな気づきや学びを得る機会となる。1年生は、既に体験し終わった2年生の報告を聴くことによって、これから始まる実習に対して具体的なイメージをつかみ、安心感を得るのである。

卒業研究と言え、4年制大学の最後の難関であり、ほとんどの学生にとっては憂鬱の種である。4年制大学の保育者養成校で、卒業研究が必修というのは、現在では少数派であるかもしれない。しかし、保育者養成校の学生たちは、実習体験について語ったり実習体験に基づいて考えたりすることは、座学での話し合いや机上の思考より生き生きと能動的に取り組む傾向にある。卒研が在学中の5つの実習と卒業後の保育現場とを具体的に直接的につなぐ取り組みであれば、卒研は、保育者養成校の学生にとっては、むしろ取り組みやすく、かつ意味のあるものになるだろう。そのように考えて、「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究における研究の型式は、実習体験をとりわけ意識して表3のように学生に提示した。

表3 「保育・教職実践演習」のための研究の型式

|       |                                                     |
|-------|-----------------------------------------------------|
| 研究テーマ | 考えたい調べたいテーマ（副題を付けると分かりやすい）                          |
| はじめに  | その研究テーマを取りあげたいと思ったきっかけ（問題意識）                        |
| 研究の背景 | 研究テーマについて文献（教科書など）で説かれている内容                         |
| 研究の目的 | 私たちのグループでは何を明らかにしたいか（研究の問い）                         |
| 研究の方法 | その問いを明らかにするための事実を収集する方法（実習日誌、指導案、インタビュー、観察、アンケートなど） |
| 結果と考察 | 収集した事実を研究の問いに沿って整理整頓して考察する                          |
| 結論    | 研究の目的（問い）に対して結論（答え）を述べる                             |
| 今後の課題 | 明らかにできた研究結果や明らかにできなかった問題を4月からの保育の仕事にどのように活かしたいかなど   |
| 謝辞    | 研究協力者への感謝を述べる                                       |
| 文献    | 引用した文献名、引用サイト名                                      |

「はじめに その研究テーマを取りあげたいと思ったきっかけ（問題意識）」であるが、これが「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究では、最も大切なところではないだろうか。なぜならば、「きっかけ（問題意識）」の中に研究のテーマ設定の着想があり、研究を最後まで追究しようとするドライブ（内発的動機付け）が込められているからである。従って、「はじめに」は、学生自身の実体験を通しての気持ちや考えが、学生自身のことで生き生きと記述されることが大切であると伝えた。

「研究の背景 研究テーマについて文献（教科書など）で説かれている内容」であるが、これはいわゆる「先行研究」に該当する。大学における卒業論文では、学生が取り組んでみ

たい研究についての先行研究を調べて、先行研究がまだ追究していない研究内容を見出して、それを研究テーマとする。しかし、「保育・教職実践演習」のグループ卒業研究では、大学の卒業論文のようなアプローチが果たして適切だろうか。本校の「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究の目的は、「これまで保育者（幼稚園教諭・保育士）になるために学んできた専門科目と、5つの教育・保育実習を通して学んできた内容とを振り返り、問題意識をもって専門科目知と実習知とをつなげて実践知の獲得」をめざすところにある。従って、基本的に授業の中で学習した専門科目の教科書、授業内で紹介のあった図書や雑誌<sup>3</sup>、『幼稚園教育要領解説』『保育所保育指針解説』などを読み返して、研究テーマに必要な箇所や関連する箇所を抜き出して引用するように伝えた。そして、そのようにして抜粋し引用した箇所のことばや文が、「**考察**」を支えることばとなり、「**考察**」を展開させる推進力になると説いた。

「**研究の方法** その問いを明らかにするための事実を収集する方法」についても、学生が実習体験の中で感じたり考えたりした（問題意識）こそが、卒業研究のテーマに直結すると考えたので、そのデータは実習日誌や指導案、現場の保育者へのインタビューやアンケートに求めるように話した。

以上のことを、具体的な研究例を示しながら分かりやすく伝えることに腐心した。研究具体例は3例示した。1例目は「**気になる子どもの心理：保育実習で出会った2歳児のエピソード記録から**」、2例目は「**乳児と保育者との愛着形成について：乳児院実習体験から**」、3例目は「**保育園で過ごす子どもの寂しさをどう癒し支えるのか：12人の保育者インタビューから**」<sup>4</sup>である。

### 3. グループ卒業研究の取り組み過程における指導内容について

第3回から第14回までのグループ卒業研究の指導内容について、2年担当の三室による記録を基に報告する。

第3回は、各クラス10グループが決まり、リーダー、サブリーダーなどの役割を分担した。また、第2回からの課題である研究テーマに沿った教科書や図書、情報などを持ち寄ることによって、主題に関する話し合いを行い、テーマの絞り込みや今後の調査方法などの方向性を決めていった。研究型式を入力した中間報告会用のグーグルドキュメントをグループ毎に配信し、グループメンバーと指導教員による共有を図った。ただし、入力および編集は学生が行い、教員は閲覧のみとした。

第4回は、「研究の背景」について改めて説明を行い、『幼稚園教育要領解説』や『保育所

---

<sup>3</sup> 雑誌は、『保育の友』『幼児の教育』『保育とカリキュラム』『月刊福祉』『発達』などを勧めた。

<sup>4</sup> 「保育園で過ごす子どもの寂しさをどう癒し支えるのか：12人の保育者インタビューから」は、村瀬明里による4年制大学保育者養成課程の卒研を基に再構成した。

保育指針解説』、保育関連雑誌なども調べて引用するよう指導した。全てのグループのテーマを図書室司書の島崎と情報共有して、学生への参考・引用図書の円滑な助言を依頼した。グループ毎に次週の中間報告会に向けてグーグルドキュメントを共同編集で行い、アンケートやインタビューの質問項目などの調査方法も設定した。

第5回は、現時点での研究状況と今後の調査方法を中心とした中間報告会を実施した。各グループの報告時間は質疑応答を入れて7分間とした。学生は全員、各グループの発表に対する感想と今後に向けた助言を記入しながら聞いた。教員からは、調査方法についての質問や意見が数多く出た。

第6回は、スクールカウンセラー高木による、演習「保護者対応と理解」が行われた。保育者が保護者対応を行う場面を想定し、ロールプレイを通して、保護者対応の姿勢を学習した。この回は、卒業研究テーマを考えるための手がかりとしての10項目のうち「⑥気になる子ども・子どもの心理」や「⑩子育て支援」に関連する演習である<sup>5</sup>。

第7回は、中間報告会で学生たちが記入した感想と助言をグループ毎に配布し、最終報告会に向けた方向性の見直しや、主題の明確化を図った。最終報告会に向けたグーグルスライドを各グループに配信し、再度指導教員との共有を行った。そして、グーグルスライドへの入力・編集は学生のみということも確認し合った。

第8回は、最終報告会に向けて、調査、研究を深めた。フィールドワークの調査用紙を配布し、幼稚園や保育所、施設へのアンケート依頼などの手続きを行った。また、年明けの最終報告会の概要を説明した。グーグルフォームで学生にアンケートを依頼した年度もあったが、回収率が低いため紙媒体でのアンケート調査を準備するグループが多かった。

第9回～11回は、最終報告会に向けて、アンケート集計や図表の作成、インタビューの文字化、文献研究などをグループ毎に進めた。指導教員は、共有された各グループのグーグルスライドを確認しながら指導に当たった。グループ毎に進捗状況が異なるため、個別に声を掛けながら助言していった。

第12回は、最終報告会の発表順や詳細を決めた。研究結果や考察について指導し、グーグルスライドを完成させ、発表の担当決めを行った。研究調査に協力した園や施設に対しての報告とお礼について具体的に指導した。

第13回・14回は、2週にわたって最終報告会を実施した。各グループの発表時間は質疑応答を入れて16分間に設定した。発表を聞く学生は中間報告会と同様、研究結果報告会レポートに発表に対する感想と今後保育者としてどのように活かしていきたいかについて記入した。中間報告会では学生からの質問があまり出なかったため、質問をするグループを予め決めて活発な質疑応答を促した。レポートは多くの学生が熱心に取り組み、いよいよ保育者になるという自覚が感じられた。

---

<sup>5</sup> 本校「保育・教職実践演習」の目的のひとつ、「⑤保護者対応」の資質能力の習得の最後の機会でもある。

#### 4. グループ卒業研究の実際

2022（令和4）年度「保育・教職実践演習」におけるグループ卒業研究の最終報告会が終了した。以下は、各グループの1部2年A組B組のグループ卒業研究題目である。

① 実習を通じた学びや課題

「一人一人に応じた指導：教育実習・保育実習の体験から学ぶ」

「年齢別の季節の制作」

「年齢別・異年齢保育：保育実習を通して感じたこと」

② 保育の方法・形態

「モンテッソーリ教育について」

「自由保育と一斉保育の比較」

③ 子どもの発達

「言葉のコミュニケーションの発達に応じた保育について」

「0～2歳の身体・情緒面の発達：月齢ごとの観点から」

④ 子どもの遊び

「子どもの遊び：3、4、5歳児砂場での関わり」

「子どもの遊び～実習を通じた年齢別の鬼ごっこの比較」

「年齢別の体を使った遊び」

⑤ 安全と健康・保健

「園で過ごす子ども達の安全：実際にあった事件から考える」

⑥ 気になる子ども・子どもの心理

「気になる子どもの心理：虐待を受けている子どもについてとその対応」

「感情の表出と他者との関わり」

「いわゆるいい子の心理と対応の仕方」

⑦ 乳児保育

「乳児との関わり方から考える保育者の援助」

⑧ 保育者の職務<sup>6</sup>

⑨ 子育て支援

「日本における子育て支援：ネウボラによる子育て支援について」

「多胎児についての多様な対応：多胎児を育てる保護者の悩みと家庭への援助」

「子育て支援：虐待を受けている子どもへの具体的な配慮」

⑩ 諸外国の保育

「海外の幼児教育・保育について」

「日本と諸外国の保育の違い」

---

<sup>6</sup> 2022年度は「保育者の職務」についての卒業グループ研究は無かった。

グループ卒業研究の実例として、「いわゆるいい子の心理と対応の仕方」を以下に掲載する。以下の掲載文は、グーグルスライドを用いて発表した内容を、ワードのファイルに文章化したものである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

## いわゆるいい子の心理と対応の仕方

杉浦玉桜    齊藤愛実    木住野彩花    小峯ひなた

### はじめに

私たちは保育園、幼稚園、児童養護施設、乳児院など様々な現場で実習を通して子どもたちと関わってきた。そのなかで、一見手がかからないように感じる”いい子”に対しての対応方法に悩んだ。

例えば、Aちゃんを使い始めてすぐのおもちゃをBちゃんに「貸して」と言われ、すぐBちゃんに貸しているAちゃんに対し、保育者が「貸してあげて偉いね」と褒めるのか、または「まだ使いたかったらちょっと待ってねってBちゃんに伝えてもいいんだよ」と教えるのか、迷う場面に遭遇した。

このような時、私たちはどのような援助や対応方法をするべきなのだろうか。

そこで本研究では、保育者、保護者、子ども、という観点から情報を集めることにより、いい子と呼ばれる子どもたちの心理と対応方法を考えてみたいと思った。また、人それぞれいい子の基準が違うため、何を基準にいい子と思うのか、保育者、保護者、子ども、それぞれの立ち位置での考えや受け取り方を調べてみたいと考えた。

### 研究の背景 1

いい子に関する文献には、多くの保護者が思う「いい子」のイメージについて以下のよう

に記述されていた。

「子どもが生まれたら、よい子に育てたいって、ふつうみんな思います。よい子に育てたいと思ったら、がまんづよい子になってほしいって、ふつうそう思います。(略) ふつう一般的に『がまんづよい子』と言った場合、感情を出さない子、つまり、すぐに泣いたり、怒ったり、ふくれたり、すねたりしない子をイメージしますよね。そういう子のほうが、よい子って評価されるわけですから。」(大河原 2006 年 pp.12~13)

### 研究の背景 2

これに対して、専門家が考える「いい子」の定義は以下のように記述されていた。

「『よい子』とは、その発達過程に応じてその時期の特徴、つまり発達課題を実現していく子どもである。『第一』、『第二』にせよ、『中間』にせよ、反抗期には反抗的な言動を現す子どもが『よい子』であり、『いたずら』や『冒険』『探検』をすることや、『けんか』をすることについてもその意義を存分に認める必要がある。」(平井 1982 年 p.11)



### 研究の背景 3

感情を表に出さない子ども、聞き分けが良く自己主張が弱い子ども、自分の感情に対抗して大人に褒められるための振る舞いをする子ども等、つまり、大人にとって扱いやすい子どものことを「よい子」だと判断する大人が多い中、このようないわゆる「よい子」が育まれていく背景について、文献には以下のように記述されている。

「問答無用のしつけを受けて、ダダをこねられなくなっている子どももいます。また、大きくなるにつれて親の期待が多くなり、その期待に押しつぶされるようにしてダダこねができなくなっている子どももいます。自分のことよりお母さんのことがずっと心配で、自分がダダをこねるところでない、という子どももいます。」(阿部 2001 年 pp.96~97)

「発達過程について知識の乏しい親たちは、自分勝手に考えた『いい子像』を子どもに押しつけて、発達を阻害していることが多い。特に、育てやすさを望む親たちによって、子どもの発達の阻害が生じている。(略) 親たちによって命令・支配を受けて誤った『いい子』の枠組にはめ込まれていたり、過保護を受けて依存性が強くなっていることによる。」(平井 1982 年 p.14)

### 研究の目的

1. 現代社会において、どのような子どもが本当の意味でのいい子なのかを考察する。
2. そのいい子を育むために保育者として保育現場で具体的にどのような対応や関わり方をするとよいのか、考察する。

### 研究の方法 1 保育者へのインタビュー調査

保育現場で5年以上の保育歴がある現職の保育者や元保育者にインタビューをする。

#### インタビュー内容 (3～5歳児について)

- 1)あなたにとっていい子とはどのような子どもか
- 2)テーマに関する実際のエピソード
- 3)どのように対応したらよいと考えるか

### 研究の方法 2 保護者へのアンケート調査

未就学児の子どもをもつ保護者、子育て経験のある保護者を対象とする紙媒体によるアンケート調査を行う。

#### アンケート内容 (子どもが3～5歳の時)

- 1)子どもを褒める時と叱る時はどのような時か
- 2)子育てにおいて家庭内のルールがあるか
- 3)自分の子どもをいい子だと思うのはどのような時か
- 4)習い事の内容と始めたきっかけ

### 研究の方法 3 子どもへのアンケート調査

10～30代の子どもがいない人を対象とするLINEによるアンケート調査を行う。

#### アンケート内容

- 1)自分の年齢

- 2)あなたにとっていい子とはどのような子どもか
- 3)自分のことをいい子だと思うか
- 4)上記質問の回答の理由
- 5)自分のためではなく周りの人のためにやったこと
- 6)やりたかったけれど我慢したこと（自身が3～5歳の時）

#### 倫理的配慮

調査協力者（インタビュー対象者とアンケート回答者）には、事前に研究の内容を説明したうえで、研究協力について同意を得た。インタビューで得たデータについては、個人情報の保護に留意し、プライバシーを守る。データの管理には十分に留意し研究終了後（2023年2月）に適切に廃棄する。

#### 結果 1 保育者へのインタビュー調査

##### 1) あなたにとっていい子とはどのような子どもか

◇M保育者（50代・保育歴約20年）

- ・親からみたら、波風立てずに親の考えや意見などになんでも素直に聞き入れてしまう子ども。親にとって都合がよい子ども。
- ・嫌と言わないで、「うん」と返事してくれる子ども。褒められることを好む子ども。

◇A保育者（30代・保育歴約10年）

大人の意図するように行動し、また期待する行動を自ら意欲的に行おうとし、結果として褒められる子どもと思っていたが、多様化が進んでいる昨今では、次のように考えるようになった。

- ・人の気持ちが分かり寄り添える子ども
- ・自分の意見を主張しながら周りの意見も取り入れられる子ども
- ・自己肯定感が高く、意欲と忍耐力を持ち、自ら進んでいける子ども

##### 2) テーマに関する実際のエピソード(対応や関わり方)

◇A保育者

①まだ使い始めたばかりのおもちゃを「貸して」と言われたら、すぐに貸して横目で保育者の顔をみていた。「使ったばかりでまだ使いたかったんじゃないの？」と聞くと、「まだ使いたかった」と言うので、そういう時は「今使ってるから少し待っててね」と伝えられるとよいと話した。

②おもちゃの片付けを最後までひとりでやってくれていたが、お友だちが横からやってきて片付けてしまい、うまく自分の気持ちを言えず叩いてしまった。片付けようとした事はとても素晴らしいし、最後までやりたかった気持ちも分かるけど、叩くとお互い嫌な気持ちになるし、怪我をしてしまうからいけないと思うと伝え、「それは僕が片付けるからやらなくていいよ」と言葉で相手に自分の気持ちを伝えてみるよう提案した。

##### 3) どのように対応すべきと考えるか

◇M保育者

たとえ他の子と同じ意見だったとしても口に出して自分の考えを述べさせる。集団の中だと目立たずに流されてしまうので、その子にスポットを当てる、気にかける。

#### ◇A 保育者

ひとりひとり、対応は異なると思われるが、自分の気持ちを相手に伝え、相手の気持ちも理解した上で、その子とその子らしく生き活きと生活していけるように配慮し、その子自身を認め、楽しく園生活が送れるようにする。

### 結果 2 保護者アンケート調査

#### 1) 子どもを褒める時、叱る時はどのような時か

##### ○褒める時

- ・努力して目標を達成した時、しようとしている時
- ・相手を思いやる言動がみられた時

##### ○叱る時

- ・人に迷惑をかけた時
- ・命に関わる危険な行為をした時
- ・嘘をついた時
- ・約束を破った時

#### 2) 子育てにおいて家庭内のルールがあるか

- ・挨拶をする（喧嘩などをして機嫌が悪かったりしても）。
- ・テレビやゲームの時間
- ・自分のものは自分で片付ける。
- ・保育園から帰ったらまず保育園で使ったものの片付けを自分でした後、ひらがなカタカナ等の学習をしてから遊ぶ。
- ・調子に乗らない。

#### 3) 自分の子どもをいい子だと思うのはどのような時か

- ・人を思いやる言動がみられた時
- ・命を大切にしている時
- ・家族を大切にしている時
- ・言われる前に行動できた時
- ・他の子のいいところを沢山見つけて教えてくれるところ
- ・知らない人にも愛想良く挨拶をしたり、会話をしていた時

#### 4) 習い事の内容と始めたきっかけ （※習い事の内容と始めたきっかけには、保護者から子どもへの想いや理想とする子ども像が汲み取れると思った為この質問を設定した。）

#### ◇本人の希望

- ・ピアノ ・エレクトーン ・茶道 ・花道 ・習字 ・英会話
- ・スイミング ・バレーボール ・チアダンス ・クラシックバレエ
- ・空手 ・野球 ・ミニバスケット

#### ◇保護者の希望

- ・合気道/空手→心技体を学べるから、体を動かすスポーツとして適当だと思ったから、心身を鍛えたいと思ったから、自分自身が習っていたから、友達が習っていたから
- ・体操クラブ→色々な運動をしてほしかったから、どんくさかったから
- ・水泳→水嫌いだったから、体力をつけるため、生存力を身に付けるため、母親が泳ぐことが苦手だったから、兄弟がやっているから
- ・そろばん→祖父母の勧め
- ・英会話→将来役に立つと思ったから、早くから外国人や異文化に慣れてほしかったから、これから必要なスキルだと思ったから
- ・テニス→自分自身が習っていたから、体を動かすことをしてほしかったから
- ・野球→休日にゲームばかりやらないようにするため、
- ・ピアノ→女の子だから、大人になっても趣味として楽しめるから
- ・学習塾→成績不振のため
- ・サッカー→兄弟がやっているから
- ・クラシックバレエ→様々な可能性を与えたいから
- ・演技→様々な可能性を与えたいから
- ・ひらがな→小学校に上がった際にスムーズに勉強に取り掛かれるようにするため

#### 結果 3 子どもアンケート調査 (LINE による)

##### 1)自分の年齢

17 歳～31 歳の計 42 名から回答を得た。内訳は、17～19 歳→7 名 (16.7%)、20～22 歳→29 名 (69.0%)、23～25 歳→4 名 (9.5%)、26～28 歳→0 名 (0 %) 29～31 歳→2 名 (4.8%)。

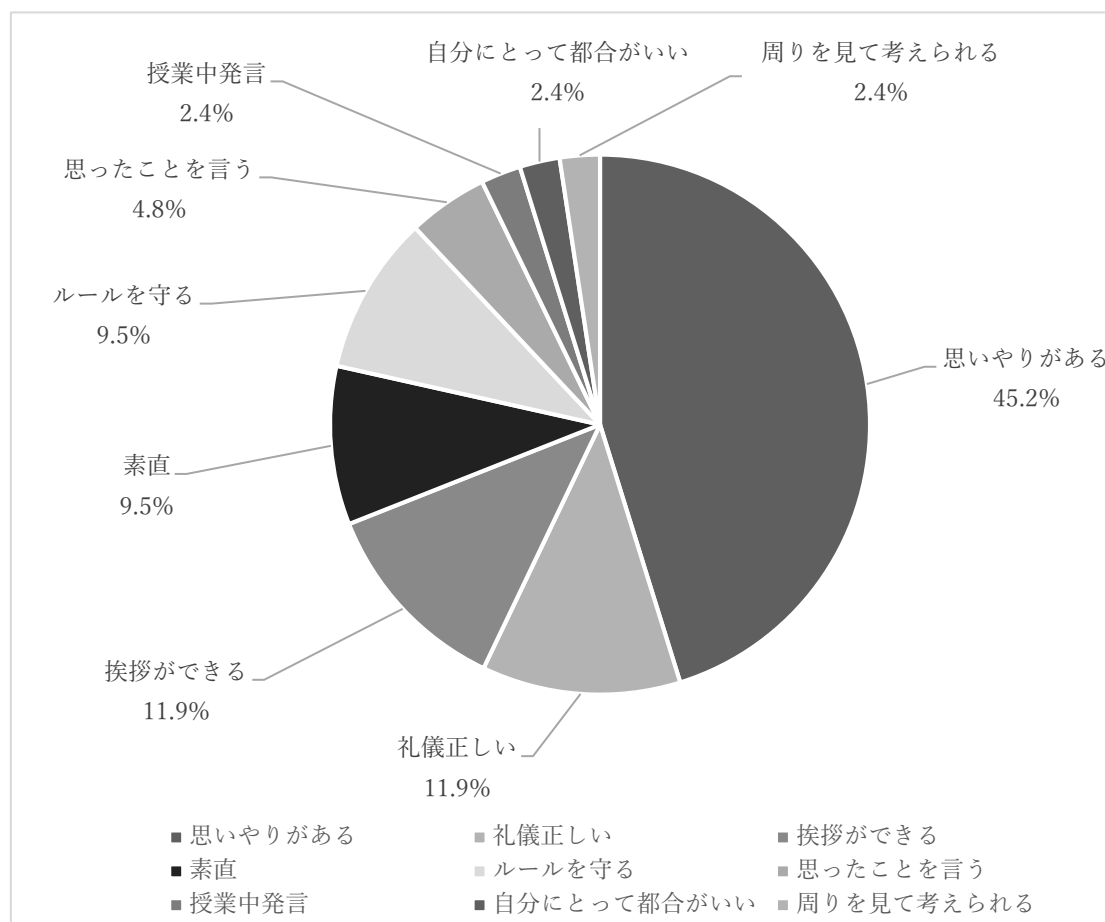
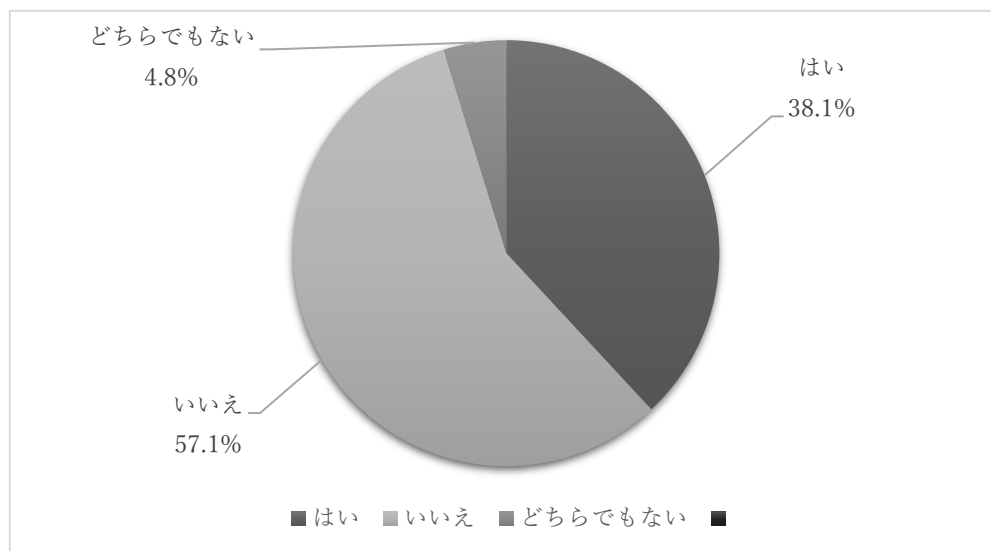
##### 2)あなたにとっていい子とはどのような子どもか

- ・思いやりがある子 (19/42) 45.2%
- ・礼儀正しい子(5/42)11.9%
- ・ありがとう、ごめんねが言える、挨拶ができる子(5/42)11.9%
- ・素直な子(4/42)9.5%
- ・ルール、言いつけを守る子(4/42)9.5%
- ・思ったことをちゃんと言う子 (2/42)4.8%
- ・授業中発言などをして参加している子 (1/42)2.4%
- ・自分にとって都合がいい子(1/42)2.4%

・周りを見て、第三者目線で考えられる子 (1/42)2.4%

### 3)自分のことをいい子だと思うか

はい→16人 (38.1%) いいえ→24人 (57.1%) どちらでもない→2人 (4.8%)



#### 4) 上記質問の回答の理由

##### ○はいと回答した人の理由

- ・親と仲がよく**反抗期がなかった**
- ・ある程度のルールは守ったり、ありがとうをちゃんと言えるから
- ・相手にとって都合の良いように行動しているから
- ・嘘が付けなく素直な性格だから
- ・親や先生の手伝いをしたり、友だちと争いになる前に譲ってあげたり
- ・会話や行動で周りが不快にならぬよう常に相手にかける言葉を選んで発言しているから
- ・疑わない事、それが強さだから

##### ○いいえと回答した人の理由

- ・約束を破ったり、遅刻をして人に迷惑をかけることがあるから
- ・**自分優先**なところがあるから
- ・状況によって自分と他者の比重が変わってしまうから
- ・親に気に入られたくて、言われたことに従ってきたつもりだが、あまりいい子だと言われたことがないから
- ・人の意見に流され、結果的に自己主張のできない人間になってしまった
- ・社会的じゃなく、勉強もできず、人の話を素直に聞けないから
- ・自分がいい子だと思えることを実践できていないから
- ・礼儀正しさに欠けていて、周りにいい子がたくさんいるから

#### 5) 自分のためではなく、人のためにやったことはどんなことか

- ・兄弟が多かったので、欲しいものがあつたけど我慢したこと
- ・遊具で遊んでいる時、遊びたそうな子がいたら誘ったり譲ったりしたこと
- ・鬼ごっこをする時、じゃんけんで負けて鬼になった子が嫌そうだったので変わってあげたこと
- ・食べたいものがあつたが、弟に譲ったこと
- ・幼稚園のお遊戯会で、やる人がいなかったのでやりたくない役をやったこと
- ・もうすぐ使えなくなりそうな短くなったクレヨンを、貸したくなかったけど貸してあげたこと
- ・みんなが持っているものを欲しかったけど我慢したこと
- ・新しい服が欲しかったけど兄弟のお下がりを使ったこと
- ・門限があつたので、遊びたかったけど我慢して帰ったこと
- ・1人になっている子に積極的に声をかけたり、泣いている子を慰めたりしたこと
- ・保育園でテレビを見るとき、最前列で見たかったけど小さい子に譲ったこと

### 考察 1 保育者へのインタビュー調査結果から

保育者が思う「いい子」とは、「大人の意図する言動や期待する言動を自ら行うことで結果として大人から褒められる場面が多い子ども」や、「素直で聞き分けがよく言い換えると自己主張が弱い子ども」であった。

しかし、幼児期に育みたい資質能力が時代に合わせて変化したことにより保育者としてのいい子像にも変化が現れていることがわかった。“自分の意見も相手に伝えつつ、相手の意見も聞き入れることができる子ども”や、“主体性をもって行動できる子ども”をいい子であると捉える保育者がいた。

A 保育者のエピソードからは、自分の気持ちを相手に伝えることができずに我慢したり手を出したりした子どもに対して、子どもの気持ちを聞き出してどのように相手に伝えればよかったのかを教えるといった対応をしていることが理解された。これは、保育者の思ういい子像が、“自分の気持ちを言葉で相手に主張し、話し合うことができる子ども”であることを意味しているのではないか。

### 考察 2 保護者へのアンケート調査結果から

保護者が思う「いい子」は、大きく6分野の意見に分けることができるのではないか。

- ①**努力姿勢**→努力して目標を達成する等
- ②**積極性**→自分から片付けや勉強をする、自分で考えて行動する等
- ③**社会性**(人間関係)→相手を思いやる、人に迷惑をかけない、嘘をつかない、約束を守る、挨拶をする、他者の長所を見つける、家族を大切にする等
- ④**道徳観**→命を大切にする、危険なことをしない等
- ⑤**運動能力**→心身が強い、運動ができる等
- ⑥**学習能力**→将来役に立つスキルを身につける、勉強ができる等

子どもの内面的な性格や態度、物事に取り組む姿勢、考え方などを基準にいい子であるかを評価する意見が多い一方で、「習い事の内容と始めたきっかけ」の回答からは、保護者が“運動能力や学習能力が高い子ども”についてもいい子だと捉えているのではないかと考えられる。

### 考察 3 子どもへのアンケート調査結果から

子どもの立場からのアンケートからは、保護者へのアンケートと同じ意見も多く見られた。いい子の定義としては特に、“礼儀正しい”、“周りを見ることができる”、“思いやりがある”、“ルールを守る”などといった**社会性**の面に多くの回答があった。一方で、異なる視点からの回答もあり、それは大きく2分野に分かれる。

- ①**自己主張**→授業中に発言する、思ったことをちゃんと言う
- ②**大人目線**→大人にとって都合がいい(聞き分けが良く扱いやすい)

また、「自分のことをいい子だと思うか」の回答からは、“反抗期がない”、“相手にとって都合のいいように行動している”、“大人の手伝いをする”、“喧嘩になる前に譲る”、“常に相手にかける言葉を選んでいる”、などといった理由から「自分はいい子である」と答えた

人が多くいた。これらはすべて、幼児期に周りの人の反応や意見を気にして自己主張が十分にできなかった可能性が考えられる回答である。

「自分はいい子ではない」と回答した人の中にも、“自分優先なところがある”、“親に気に入られなくて従ってきたつもりだがいい子だと言われたことがない”、などといった回答があり、これらも自分優先であることにマイナスなイメージをもっていたり、大人の反応や評価を気にしていたりしたことが推測できる。

「自分のためではなく人のためにやったことや我慢したことは？」という質問に対する回答からは、幼児期に自分の意思とは反していたが、相手のことを考えて我慢したり受けけたり、相手との衝突を避けて自分の欲求を自分の中で抑えたりした経験がある回答者が多くいた。こういった場面で問題となるのは、

- ・我慢している子どもの様子に気づいた大人がいたのか
  - ・我慢した子どもは、結果思い通りにならなかったとしても、誰かに自分の気持ちを伝えて受け止めてもらえたのか
- という点ではないだろうか。

#### **結論(まとめ)1.**

現代社会において、どのような子どもが本当の意味でのいい子なのだろうか。保育所保育指針の第一章総則では、子どもの主体性や協同性等を育むことの重要性がうたわれている。調査結果や文献の情報からもわかるように、こういった非認知能力の育成が強く求められる現代では、ただ大人の言うことを素直に聞く子どもや、相手との衝突を避けて自己抑制する子どもだけがいい子であるとは言えないと考える。

- ・自分の気持ちや意見を相手に言葉で主張することができる子ども
- ・相手の気持ちや意見を聞き入れ、話し合う姿勢をもてる子ども
- ・周囲の人を大切にすることはもちろん、自分のことも大切にできる子ども
- ・人や自分のために、主体的に行動できる子ども
- ・大人に褒められることより、自分の意思を根拠に行動する子ども

これらもいい子であると言える。

大人の言うことを素直に聞く子どもや、自分の欲求を抑えて他者との衝突を避ける子どもは、大人にとっては扱いやすく問題行動も少ないため、いい子であると判断されがちであると考えていたが、調査結果は必ずしもそういった意見ばかりではなく、子どもの主体性や協同性に基づいた評価をする人が少なからずいた。

時代変化により社会で求められる力が変わっていくとともに、保育に携わる人以外の「いい子」に対する考え方も変わってきていることがわかった。

#### **結論(まとめ)2.**

そうしたいい子を育むためには、保育者として保育現場で具体的にどのような対応や関わり方をするとよいのだろうか。私たちが春から現場に出て、実際子どもと関わる上で保育者としてすべきことは、



- ・子どもの本音を聞き出す
  - ・最終的に子どもの希望通りの結果にならなかったとしても、保育者が代わりに子どもの気持ちを聴き、受け止め、共感する
  - ・自分の意見を相手に伝えるための方法を教える
- ことである。

多様化が進む現代で、自分の考え、思いを自分の言葉や態度で表現できるようになることはとても大切なことであり、課題だと感じた。

長所も短所もあってこそ人間なので、保育者は長所も伸ばしつつ、短所を長所に言い換える術を子どもたちに伝えていけたら、子どもアンケートで「自分はいい子だと思いますか？」の回答で「いいえ」と答えた方たちのような意見が、よりポジティブなものに変わっていくのではないかと考えた。

### 今後の課題

今回のグループ卒業研究を通して、今後保育者として子どもたちと関わっていくなかで、課題になると考えられる点は以下のとおりである。

- ・我慢してえらいね、譲って優しいね、は保育者として正解なのか
- ・自己肯定感を育むためにはどのように関わればよいのか
- ・子どもの感情と言動が一致していない時の対応方法
- ・家庭での育て方に保育者はどのように助言したらよいのか

これらについては、保育者としての子どもたちとの関わりを通して、先輩保育者や同僚保育者たちと話し合いをしながら日々模索していきたいと考えている。

### 引用・参考文献

- ・阿部秀雄（2001年）『ダダこね育ちのすすめ』中央法規出版
- ・平井信義著（1982年）『いい子・わるい子 シリーズ・現代の子どもを考える』共立出版
- ・厚生労働省（2018年）『保育所保育指針解説』
- ・大河原美以（2006年）『ちゃんと泣ける子に育てよう』河出書房新社

~~~~~

以上が、グループ卒業研究の実例「いわゆるいい子の心理と対応の仕方」の全文である。このグループ卒業研究のよいところは、4つある。第一に、筆者の4人の学生が5つの実習体験を通して切実に感じた問題を研究テーマにした点である。次に、そのテーマに沿った文献<sup>7</sup>を熱心に読み込んだことである。さらに、研究の目的に沿って、保育者、保護者、子ど

---

<sup>7</sup> 研究テーマに即した、しかも読みやすい図書を、本校図書室司書の島崎美恵子が紹介し用意したことによって、学生も興味関心を持続させて読み通すことができた。

もという三者の立場からのインタビューやアンケートを取った点である<sup>8</sup>。最後に、4 人の学生が、三者から得たデータと何度も往還して対話を重ねていったことである。このデータに基づいた学生たちの熱心な話し合いが確かな考察を生成していき、発表時の質疑応答における説得力のある説明につながったものと思われる。

## 5. 「保育・教職実践演習」とグループ卒業研究の意義

学校の最後の授業は、卒業式である。2022 年の秋から冬にかけて各地の保育現場で保育士による不適切な保育行為が次々に報道された。折しもグループ卒業研究に取り組んでいる最中の報道であった。この問題について、「保育・教職実践演習」担当の教員として、何らかのかたちで言及しなければならないと考えた。

本校では、卒業式終了後に、2 年担当教員が卒業生に対してスピーチをする場面がある。その機会を捉えて次のように話した。

「みなさんが2 年生に進級した4 月から5 月にかけて、ひとりひとりと面談をしました。ある学生が、『私が保育者になろうと思ったのは、幼児の頃に入っていた保育園が、午睡時にお昼寝をしない子どもを檻のような所に入れる保育園でした。それが嫌で嫌でたまらなかったので、そうした保育をしない保育園を作りたいと思って、保育者養成校に入りました。』という話をしました。

去年は、保育者が幼児に不適切な保育をしたことが連日のように報道されました。どうしたらこうしたことが防げるのでしょうか。二人の元園長<sup>9</sup>に聞きました。『それは、日ごろから日々の保育について話し合える職場づくり、保育について学び合える時間づくりをすることです』という答えが異口同音に返ってきました。保育者同士が、保育について話し合う、学び合うということが、不適切な保育行為を防ぐ手立てになるということです。

皆さん方は、保育・教職実践演習で、グループ卒業研究に取り組みました。その際に、5 つの実習で体験した保育についてお互いに語り合ったと思います。その体験を基に、よりよい保育のあり方を調べ、グループで考えをまとめて、発表し合いました。

どうぞ、その話し合いや学び合いを、4 月からの保育現場、幼稚園現場で大いに発揮して、子どもたちを元気に、そして、笑顔にしてください。期待しています。」

グループ卒業研究の取組みが、不適切な保育行為を防ぐためのささやかな一歩になることを願ってやまない。そこに「保育・教職実践演習」の意義のひとつがある。

---

<sup>8</sup> インタビューやアンケート調査結果の示し方には課題が残ったが、これは教員側の指導上の課題である。

<sup>9</sup> 東京保育専門学校専任教員である近山あや子と帝京科学大学千住桜木保育園元園長である大槻千秋に意見を求めた。

## 執筆者（執筆順）

|       |                                                                |
|-------|----------------------------------------------------------------|
| 高木麻美子 | 本校専任教員「幼児と人間関係」「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」<br>「子どもの理解と援助」「保育・教職実践演習」 |
| 今井 まり | 本校専任教員「音楽表現」「音楽（器楽Ⅰ）」「音楽（器楽Ⅱ）」「指導法表現」<br>「保育・教職実践演習」           |
| 橋本 萌  | 元本校専任教員「教育原理」「教育行政学」「保育・教職実践演習」                                |
| 岡本弘子  | 元本校専任教員「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」「保育・教職実践演習」                               |
| 伊藤政弘  | 本校専任教員「社会的養護Ⅰ」「社会的養護Ⅱ」「子育て支援」「保育・教職<br>実践演習」                   |
| 三室絵梨子 | 本校専任教員「幼児と健康」「指導法表現」「体育（講義）」「体育（実技）」<br>「体育Ⅱ（身体表現）」「保育・教職実践演習」 |
| 近山あや子 | 本校専任教員「保育実習指導Ⅰ」「保育実習指導Ⅱ」「保育・教職実践演習」                            |
| 平山 裕子 | 本校専任教員「幼児と環境」「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」「保育・教職実践<br>演習」                     |
| 柿崎晋一郎 | 本校管理部職員                                                        |
| 大須賀隆子 | 本校専任教員「幼児理解の理論と方法」「幼児と言葉」「指導法言葉」<br>「教育相談・臨床心理学」「保育・教職実践演習」    |

東京保育専門学校紀要 第5号

---

発行日 令和5年6月14日

編集・発行 学校法人聖心学園東京保育専門学校  
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 2-32-30  
TEL 03-3311-7014 FAX 03-3312-2060  
印刷・製本 株式会社 平河工業社  
〒162-0814 東京都新宿区新小川町 3-9  
TEL 03-3269-4111 FAX 03-3269-4106